九州大学経済学部 同窓会報 第59号

九州大学経済学部同窓会
事務局　〒812－8581
福岡市東区箱崎６－19－１
九州大学経済学部内
TEL 092-642-2442 FAX 092-642-2348
mail：dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
郵便振替　01750－6－21743

目　次　Contents

平成27･28年度行事予定（総会のご案内）／１
トマ・ピケティ『21世紀の資本』を読み解く
磯谷　明徳／２
T.ピケティ『21世紀の資本』について　近　昭夫／５
支部だより
東京支部　事務局長　吉元　利行（昭和53年卒）／７
関西支部　事務局長　中野　光男（昭和50年卒）／８
福岡支部　事務局長　平井　彰（昭和55年卒）／９
同窓生健筆模様
『国際相続の法務と税務』について
羽根由理子（昭和59年卒）／11
『石炭産業論 矢田俊文著作集 第一巻』
外川　健一（平成4年博士入）／13
リレー随想
ある日の向坂先生　大屋　祐雪（昭和26年卒）／15
わが人生と広がる交友の輪　井上　俊二（昭和32年卒）／16
100回が視野に――九大どげん会（S40経済学部卒）
林　俊一（昭和40年卒）／18
広島からリレー通信　若松　重喜（昭和45年卒）／19
卒業後あっという間の40年!!　佐藤　敏弘（昭和50年卒）／20
若かりし日の懐かしき朋友たち
鳥越　憲行（昭和52年卒）／22
大学はどこへ向かうのか　大下　丈平（昭和53年卒）／23
過去と選択　水田　晃斉（平成24年卒）／24
経済学部名誉教授の会／26
国際学術交流振興基金執行状況報告（平成26年度）
国際交流委員会委員長　川波　洋一／28
平成26年度卒業生就職状況／28
同窓会役員名簿／30
同窓会歴代会長／32
同窓会会費納入のお願い／32

平成27､28年度行事予定（総会のご案内）

平成27、28年度の各支部総会を下記の通り開催いたします。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内申し上げます。

平成27年度　広島地区九大法・経同窓会総会

日時　平成27年11月27日（金）19時～ 21時
場所　シェラトンホテル広島
（広島市東区若草町12－１
TEL（082）262－7111）
<お問い合わせ先>
広島地区九大法・経同窓会事務局　藤森　誠
中国電力㈱　お客さまサービス本部内
TEL（050）8202－2057
E-mail　278828@pnet.energia.co.jp

平成27年度　大分県支部総会

日時　平成28年２月５日（金）18時30分～ 21時
場所　ホルトホール大分　２Ｆ　セミナールーム
（大分市金池南１－５－１
TEL（097）576－7555）
<お問い合わせ先>　大分県支部事務局　工藤　順一
日本文理大学経営経済学部
TEL（097）524－2689（直通）
E-mail　kudoji@nbu.ac.jp

平成28年　全国・関西支部合同総会

日時　平成28年２月20日（土）15時～
場所　阪急ターミナルスクエア17（阪急17番街）
（大阪市北区芝田１－１－４
TEL（06）6373－5790）
<お問い合わせ先>　関西支部事務局　中野　光男
富士精版印刷株式会社管理本部　気付
TEL（06）6394－1182
E-mail　m-nakano@fujiseihan.co.jp

平成28年度　全国・福岡支部合同総会

日時　平成28年６月３日（金）18時～
場所　ホテルニューオータニ博多
（福岡市中央区渡辺通１－１－２　TEL（092）714－1111）
<お問い合わせ先>　福岡支部事務局　平井　彰
（一社）九州経済連合会内　TEL（092）761－4261
E-mail　hirai@kyukeiren.or.jp

平成28年度　東京支部総会

日時　平成28年７月７日（木）18時～20時50分
場所　学士会館　210号室
（東京都千代田区神田錦町３－28 TEL(03)3292－5936）
<お問い合わせ先>　東京支部事務局　吉元　利行
株式会社オリエント総合研究所
TEL（03）5877－5590　FAX（03）5877－5859
E-mail　toshiyuki.yoshimoto@onet.orico.co.jp（会社）
t29yoshimoto@aol.com（自宅）

トマ・ピケティ『21世紀の資本』を読み解く

経済学研究院長
磯谷　明徳氏

はじめに

小論は、本年７月７日の七夕の夜に東京・学士会館で開催された平成27年度同窓会東京支部総会での講演をまとめたものである。ピケティ『21世紀の資本』は英語版でほぼ700ページ、日本語版でも同様に700ページにも及ぶ大著である。読もうという意欲をかき立てなければ、Coffee-table bookになりかねない代物である。今回は、全てを網羅して読んだ訳ではなく、研究者としては本来やってはならない「つまみ食い」的な視点から論ずるというアプローチをとらざるをえなかったことを予めお断りしておきたいと思う。

そこで、この小論では、『21世紀の資本』の理論的側面に焦点をあてることにしたい。何よりも問題にしたいのは、「ピケティは、資本主義においては格差が不可避的に拡大するということを理論的に明らかにした」と世間一般に言われていることが、果たしてそうなのかということである。

最初に、この著作で彼が主張したのは何かを簡単にまとめておこう。所得には労働に基づく所得と資本（資産）に基づく所得がある。労働に基づく所得は所得の総成長率（g）より高い比率で成長することはできない。これに対して、資本に基づく所得は資本収益率（r）が下がらず、その資本収益を再投資し蓄積し続けるとすれば、この所得は r の率で成長する。しかも過去のデータによれば、$r > g$ である。この不等式が今後も継続するならば、資本を持つ者と持たない者の格差は拡大し続ける。不労所得者が再生産され、その結果は世襲資本主義ということになる。これへの対策として提起されるのが、資本に課税せよという富裕税である。資本収益については規模の経済が働くので累進税にする必要がある。しかも、資本は国外に逃避するから、それは世界的な規模での累進資本税でなければならない。

ピケティの目新しさ

ピケティの議論と主張に対しては、上での世界的な規模での累進資本税の実現可能性を含めて、数多くの批判がある。しかし、『21世紀の資本』の世界での発行部数は150万部にのぼり、2014年12月に刊行された日本語版もすでに14万部に達しているという。最近では一時ほどの勢いはなくなったとはいえ、依然としてピケティ旋風は続いている。それ以上に、アカデミックな分野において、今後格差の問題を論ずる際には、最早ピケティが論じたことを避けては通れないということである。それではピケティの「目新しさ」とは何なのだろうか。『日本経済新聞』(2015年２月11日・12日朝刊）に掲載された２人の経済学者、森口千晶氏と阿部彩氏のピケティ評価が、極めてバランスのとれたものであると思う。森口氏の評価はこうである。ピケティは、成長と格差を論ずる際の長期データの欠落という問題を解決した。また、彼は税務統計と国民所得統計から所得占有率という独自の格差の指標を推計する方法を編み出した。そして、新興国を含む30カ国に関する同様の指標を推計しデータベースとして公開した（The World Top Income Database)。阿部氏は次のように評価する。所得分布において、特に資産における格差を指摘したこと、そして、成長が格差を縮小させるという仮説（「クズネッツ曲線の仮説」）は誰の痛みも伴わず魅力的だが、ピケティの歴史分析はそれを「おとぎ話」として否定した。森口・阿部両氏のピケティ評価に基づいて、彼の著作の目新しさについて述べるならば、それは、より広範、かつ長期の比較可能なデータの推計に基づいた歴史統計学の極めて優れた業績だとすることが適切だろう。したがって、ピケティ『21世紀の資本』は、経済学の理論を革新し、資本主義に関して何か新しい理論を打ち立てたといったものではないと見るべきである。彼を一躍

有名にした「$r > g$」の不等式にしても、ピケティは、この不等式は「論理的必然ではなく、歴史的事実と考えている」（訳 p.368）と述べているところからも、この点を確認できるように思う。

『21世紀の資本』の理論的な側面への着目

この書物が、理論的な書というよりも歴史統計学の書だといったとしても、本書における理論的な側面には数多くの興味深い点を見ることができる。もちろん、それは肯定的なものばかりではない。以下では、３点について見てみよう。

資本主義の第一基本法則と第二基本法則：『21世紀の資本』で使用される基本的な概念を紹介する第Ⅰ部では、資本主義の「第一基本法則」と呼ぶものが登場する。$\alpha = r\beta$（α は資本収益・所得比率、r は資本収益率、β は資本・所得比率である）。この式は純然たる会計恒等式であり、「法則」といった大げさなものではない。この式は本来、因果関係を含まないが、ピケティは、この式に、右辺が左辺を決めるという因果を読み込む。他方、第Ⅱ部「資本／所得比率の動学」において登場する資本主義の「第二基本法則」とされる、$\beta = s / g$（s は貯蓄率、gは所得成長率である）は「法則」と呼ぶに値するものといえる。この式では、s と g の値に応じて β が決まるという関係になっている。この等式は長期的な均衡状態を表すものであるが、ピケティは「この均衡状態が完全に実現することはない」（訳 p.177）とも述べる。ところで、この第二基本法則における考え方は、ロバート・ソローに代表される新古典派経済成長論のロジックそのものであり、「理論的に新しいところは何もない」といえる。著作本文中では、上の関係式が何の説明もなしに提示されるが、この式の導出については、専用Webサイト（http://piketty.pse.ens.fr/capital21c）において、第５章への補遺として公開されている。また、この関係式のより詳細な分析や相対価格効果を加えたものが、パリ経済学校での彼の2010年のワーキング・ペーパー（"On the Long-Run Evolution of Inheritance: France 1820-2050"）に示されている。Yを国民所得、Wを資産（資本）とすれば、$\beta = W / Y$と定義される。各変数を時間 t の関数として、この定義式を時間 t で微分すると、最終的に、$\beta'(t) = \beta\left(\frac{s}{\beta} - g\right)$（ここでは、$W'(t)=I=S$ を仮定。I は投資、S は貯蓄である）を得る。この式でカッコ内がゼロである時、$\beta'(t) = 0$ となる。この時には、$s / \beta = g$、したがって、ピケティが第二の基本法則と呼ぶ $\beta = s / g$ が導かれる。この式が意味するところは明らかである。たくさん蓄えて、ゆっくりと成長する国では、長期的には所得に比べて莫大な資本ストックが蓄積される、すなわち長期的に高い β になる。また、g は国民所得の総成長率なので、g = 一人当たり国民所得の成長率＋人口成長率である。それゆえ、一人当たりの所得成長率がさほど望めず、人口の増加も望めない諸国（例えば、ヨーロッパ諸国や日本）ほど、長期的に高い β が出現する可能性が高くなる。この点から、世界の資本・所得比率 β の推移を描いた第５章の図５－８（訳 p.203）での1910年代から始まり1950年に底をうつようなU字型の β の曲線というのは、長い歴史の中での例外的な事例に過ぎないということになる。この時期には、二度にわたる世界大戦による資本の大規模な破壊やインフレによる資産価値の激減、さらにきつい累進課税の導入などがあったからである。

β の上昇は、国民所得に占める資本のシェアである資本分配率 α を必然的に上昇させるのか？：β の上昇、すなわち資本（富）が増えること自体、悪いことではない。増えた資本（富）が社会全体にバランスよく分散する構造になっていないことが問題なのである。ピケティの言う資本主義の第一基本法則と第二基本法則から、$\alpha = r\beta = rs / g$ である。実はこの式において、β の上昇が必然的に α の上昇につながるのを「理論的に」説明するのは容易でないのである。理論的には、資本と労働を生産要素とする生産関数において、資本による労働の代替の弾力性（σ）が１よりも大きいという条件が必要になる。$\sigma > 1$であるのは、資本が割安になり、資本による労働の代替が容易に行うことができる、例えば、資本の使い道がより多くなるような場合である。この場合、資本収益率 r の低下率がさほどのものでなく、資本・所得比率 β の上昇率の方が r の低下率を上回ることによって、その積である資本分配率 α が上昇することになる。事実、この著作では、1970年から2010年までのヨーロッパ諸国では、β と α の両方が上昇したことを指摘している。それでは、この時期、そして21世紀においても、資本による労働の代替の弾力性（σ）が１より大きいことを実証できるのか。ピケティは、これについて「歴史的データにもとづく推計では、（σ は）1.3－1.6だ」（訳 p.230）と述べるだけである。

「ケンブリッジ資本論争」に関する言及における不可思議：第６章には、1950年代・60年代に英国ケンブリッジと米国マサチューセッツ・ケンブリッジとの間で交わされた「ケンブリッジ資本論争」への

言及がある。そこにおいて、ピケティは、この論争で勝利したのは米国ケンブリッジ側であったというような書き方をしている（訳 p.240）。しかし、論争の米国側での当事者であったポール・サミュエルソン自身が、1966年の論文（*The Quarterly Journal of Economics,* Vol.80, No.4）において、英国ケンブリッジの批判の方が論理的に正しいことを認めている。ピケティがこのことを知らないはずはない。彼は、「ソローのいわゆる新古典派成長モデルがはっきりと勝利したのは、やっと1970年代になってからだ」（訳 p.240）と書いている。これは、ソローの経済成長モデルに対する単なるリップ・サービスなのか、それともソロー・モデルにおける均斉成長経路上でも、資本所有による格差拡大を示すことができると主張したいのか、その意図するところが何かについては不明としか言いようがない。

例外としての米国

米国の資本・所得比率βは、19世紀末から今世紀にかけて、安定的に推移してきた。それゆえ、米国における所得格差の拡大、特に1980年代からの国民所得における上位百分位のシェアの急上昇は、βの上昇によってもたらされたのではない。1980年代以降の金融・非金融部門でのスーパー経営者の台頭が、米国での格差の拡大を導いたのである。これはアングロ・サクソン諸国（米国、英国、カナダ、オーストラリア）に共通する現象（第９章の図９－２、訳 p.328）であり、これと好対照をなすのが、大陸ヨーロッパ諸国と日本である。後者の国々での上位百分位が国民所得に占めるシェアは、前者の国々ほど上昇していない（第９章の図９－３、訳 p.330）。こうした違いを生み出したのは何かについて、ピケティは、スーパー経営者の台頭や技術革新を先導する起業家の存在を指摘するだけだが、アングロ・サクソン諸国と大陸ヨーロッパ諸国・日本との間の企業統治のあり方の違いに目を向けるべきであると思う。

日本の格差拡大をどう見るか

それでは、日本における格差拡大をどう見るべきなのか。The World Top Income Databaseによって、日本の上位十分位および上位百分位の所得シェアの推移を確認してみる。1947-2010年の期間での上位１％の所得の占有率については、ほとんど上昇は見られない。したがって、日本の格差問題に対して、Occupy Wall Streetでの「１％対99％（“We are the 99%”）」のようなスローガンを持ち出しても何の説得力も持ちえない。ところが、日本の上位十分位の所得占有率は、1990年代初めから急上昇

し、2010年には40％にまで達している。上位10％の所得シェアが上昇しているということは、それ以下の所得層でのシェアが低下していること意味しているはずである。それゆえ、多くの研究者が指摘するように、日本の格差問題においては、所得下位層に広がる貧困層の問題こそが重要なのである。実際、日本の相対的貧困率は、1985年12.0％から2012年の16.1％に上昇しているし、子ども（17歳以下）の貧困率も1985年の10.9％から2012年の16.3％へと上昇している。日本では、明らかに貧困の再生産という事態が進行している。2012年の貧困基準は、二人世帯で年間可処分所得が173万円である。こうした低所得層の存在はピケティが描く世界からはあまりにもかけ離れている。したがって、日本の格差拡大については、上位所得層の所得シェアについて議論することも重要だが、下位10％あるいは20％の所得シェアの変動についても同時に議論する必要がある。阿部彩氏が言うように、「日本の格差拡大は富の集中よりも貧困問題」にあるのである。

補足：ライバルとしてのピケティとアセモグル

アセモグル（Daron Acemoglu）は、米国経済学会での40歳以下の若手研究者を対象とするジョン・ベイツ・クラーク賞を2005年に受賞している。この賞を受賞した後にノーベル経済学賞を受賞した経済学者は多い。ちなみに第1回受賞者（1947年）は、ポール・サミュエルソンであり、その23年後にノーベル経済学賞を受賞している。アセモグルも将来、ノーベル経済学賞を受賞する可能性は高い。アセモグルとピケティは、共通する点が多い。２人とも若く、40歳台、1993年からの２年間はともにＭＩＴの若い教員であった。アセモグルとロビンソンの共著『国家はなぜ衰退するのか』の日本語訳は、上・下巻で700ページを超え、その主題は長期データに基づいて経済の大きな変化を議論するというもので、この点でもピケティと共通する。

ところで、ピケティを批判するアセモグルとロビンソンの共著論文（“The Rise and Decline of General Laws of Capitalism”）が2014年12月に公表されている。批判の骨子はこうである。リカードとマルクスは資本主義の一般法則を唱えたが、それらは指針として間違っていたし、そのことで人々を惑わした。ピケティも同様であるというのである。

アセモグルと対比するならば、ピケティは明らかに主流派の経済理論（新古典派経済理論）に懐疑的であり、これに対して、アセモグルは将来にわたって主流派の経済理論の伝道者であり続けるだろう。この夏、福岡に滞在していたフランス社会科学高等研究院（EHESS）に所属する旧知の経済学者に、「ピケティは、新古典派経済学者なのか、それとも異端の経済学者なのか」と尋ねてみた。彼は、一瞬間を置いて、次のように答えた。「ピケティはフランスの経済学者である」と。

T.ピケティ『21世紀の資本』について

九州大学名誉教授
近　昭夫氏

この春、T.ピケティ（Thomas Piketty）の『21世紀の資本』（2013年）について話す機会があった。ピケティの本は日本でも昨年の夏から評判になっており、その頃までにアメリカでは英訳本が50万部以上、日本でも昨年末に出た日本語訳（山形浩生・他訳『21世紀の資本』みすず書房）が13万部売れたといわれていた。１月にはピケティが来日して講演したりテレビに出演したりしたので、さらに多くの人が彼の本に関心を持つようになっていた。この本について説明するようにいわれたので、少し時間をかけて読んでみた。その時に思ったこと等を書いてみたい。

この本が多くの人に注目されたのは、アメリカでも日本でも暫く前から経済的格差の拡大が社会的に大きな問題になっていたが、折よくこの本が格差の拡大を真正面から取り上げて分析し、その解決の方向を提示しているからであろう。その論述の仕方も具体的で分かりやすい[1)]。そこで、ピケティの本のなかで最も興味深い、格差をめぐる議論に焦点を当てて見ていくことにしよう。

ピケティは1971年生まれの少壮の研究者であるが、15年以上にわたって30人ほどの共同研究者と収集した厖大な資料・史料、データを基に「世界トップ所得データベース」（WTID : World Top Income Database）を作成し、主としてそれに基づいてこの本を書いている。格差についての研究のきっかけは、S.クズネッツの研究であった、と言う。クズネッツは1913－1948年のアメリカの税務統計や国民所得統計を分析して、国民間の所得格差は経済成長と共に縮小していくと結論した。しかし、クズネッツの結論が妥当するのは第二次世界大戦後の一時期だけであって、長期的に見ると格差は拡大し続けており、そしてそれは自然に収縮することはない、とピケティは言う。

彼はこの本の本論ともいうべき第Ⅲ部で、先進諸国の格差の拡大について分析している。**まず所得の格差。**フランスについて。全国民の総所得のうちトップ10％の人々の所得が占める割合は第一次世界大戦直前には45－50％であった。しかし、第二次世界大戦の直後には30％を割り込んだ。1970年代には35％を超えるまでに回復したが、その後は30－35％に止まっている。ただし、総賃金に占めるトップ10％の賃金（経営や管理などの“労働”の対価）のシェアーは25－30％で安定している。しかしこの間に、トップ１％の占めるシェアーが急落した。1910年代にはそれは総所得の20％であったが、1940年代には10％以下になった。この時期に、バルザックの小説に出てくるような財産からの収入に頼る不労所得者層が没落し、そのシェアーが急減したからである。アメリカについてはどうか？　ここでは、トップ10％の総所得に占める割合は、1930年代末までは45％前後であった。しかし、第二次世界大戦後には35％以下に急落し、1970年代まで30－35％であった。ところが1980年代になって急増し、2000年代には45－50％になった。この状況が続くと、2030年代には60％になることも見込まれる。これは主として、トップ１％のシェアーが急増してきたことによる。それは1980年代までは10％前後であったが、2000年代には20－22％に倍増した。それは前例のないような高額の所得・給与を得ている「スーパー経営者」が増えてきたことによる。

アングロ・サクソン諸国（米国のほか英国、カナダ、オーストラリア）では、アメリカと同様の動きが見られる。イギリスにおいて、その類似が特に顕著である。他のヨーロッパ諸国と日本は、フランスと類似した動きを示している。

富（ストック）の格差についてはどうか？　フランスでは1880－1913年にトップ10％が全国の富の82－85％を、トップ１％が50－60％を占めていた。1930年代からは減少し始めた。しかし、2010年代においても依然としてトップ10％はその60％、トップ１％は20－25％を占めている。イギリスでも同様である。アメリカでは、トップ10％もトップ１％もフランスより高く、2010年にはそれぞれ70％、30％を超えている。

このような格差が生じ、拡大するのは、**ｒ＞ｇ（ｒは資本収益率、ｇは経済成長率）**だからである。歴史的にみても、資本収益率は経済成長率より大きかった。現在でも「資本収益率が常に成長率よりも高いという事実は、富の不平等な分配を強力に後押ししている」（376ページ）。そしてこれは、「論理的必然ではなく歴史的事実と考えている」(368ページ）とピケティは書いている。

教育の普及と充実による知識と技能の拡散によって、格差は収斂･縮小することはあり得る。だが「一方で、格差拡大の強力な力もそこにはある。これは民主主義社会や、それが根ざす社会正義の価値観を脅かしかねない」（601ページ）。では、このような**格差の拡大をどのようにして抑制するのか？**　ひとつは、所得と相続に対する累進課税によって格差の拡大を抑制することである。だが、最も理想的で正しい解決策は資本に対する世界的な年次累進課税である、とピケティは言う。たとえば100万ユーロ以下の財産には0.1か0.5％、100－500万ユーロの財産には１％、500－1000万ユーロに対しては２％、数億や数十億ユーロの財産には５％か10％というような年次資本課税である（603ページ）。これを実現するためには、高度な国際協力と地域的な政治統合、そして広範な情報の交換が必要である。これはユートピア的な理想にみえるかもしれない。しかし､｢それが無理でも、地域や大陸単位での課税を試すことはできる。特にヨーロッパでは、そうした課税を受け入れる国から順に始められるかもしれない」（489－490ページ）と彼は書いている。

この本で最も印象的で興味をひくのは多くのグラフや統計表を用いて、長期にわたる各国での格差拡大の様子を具体的に示していることである。アメリカの所得分布においてトップ10％や１％のシェアーが拡大していることは、これまでにもいくつかの本で取り上げられていた[2]。ピケティの研究は、これらの研究より長い期間について、より系統的に進められている。ピケティの研究の基本的部分については、クズネッツもクルーグマン、ステグリッツも好意的に見ているようである。

しかし、ピケティが主として租税関係の資料・史料に依拠したことについては、懸念や疑問を示している人が多い[3]。というのもこれらには脱税や過少申告等がつきものであり、どこまで信用できるかという問題がついてまわるからである。

また､長期にわたって比較するときに､時々のデータの均質性・比較可能性をどのように確保したのかが明示されていない。WTIDのデータも、原資料がどのようなものであったかはよく分からない。長年統計について考えてきた者としては、そもそものデータ源・原資料がどんなものであり、それらをどのように加工・利用しているのかを知りたいと思う。

ピケティはトップ10％、トップ１％というような富裕層の所得や富は分析をしているが、彼らの巨大な所得や富がどのような社会的関係や社会的・経済的構造を経て得られたのかについては触れていない。この点は、日本の諸論者が指摘しているとおりである。

格差拡大の理由として**ピケティが示している基本矛盾ｒ＞ｇについて**は、異論のある人が多いようである。しかし､ピケティによればこれは｢歴史的事実」であり、今後議論を深めていく端緒として提示しているようにもみえる。池上彰氏がピケティとの対談で、東大での講義の後で学生から「ｒがｇより大きいのはなぜですか」と質問されて、ピケティが「よく分からない。でもデータを調べたらそうなっているんだ」と答えたのを聞いて驚いたといっている[4]。それに対してピケティは、「たしかに“理由はない”と答えましたが､論理的な説明はできますよ｣と言って自説を述べている。このことは､彼がこの本の｢おわりに」で、「本書が利用した情報源は、これまでの著者の誰がまとめたものよりもずっと包括的だが、それでも不完全だし不十分だ。私の結論は本質的には仮のものであり、疑問視して論争されるべきものだ」（601ページ）と書いていることにも符合しているように思える。

累進課税については投資意欲を削ぐとか、海外への資本流出を招くとかいって反対する人がいる。しかし、多くの人は格差の拡大が社会的不平等を深刻なものにし、社会的不安を増大させることを危惧して、高所得や遺産相続に対する累進課税には同意しているようである。だが、ピケティが強く主張している世界的な累進的資本課税については、空想的だと評する人が多い。ピケティ自身もそれがすぐに実現するとは考えていない。出来るところから手をつけていけばよい、と考えているようである。

ピケティの本は世界的な格差の拡大を背景に多くの人の共感を呼んでいるが、この本が提起した問題をシニカルな目で見て受けながすのではなくて[5]、これを機に、今後もこの問題の研究が深められていくことを期待したい。

1）この本が評判になりだした頃のアメリカでの人々の対応については、赤木昭夫「ピケティ･バニック　－『21世紀の資本論』は予告する」『世界』2014年8月号､広岡祐児「オバマも注目『21世紀の資本論』が米国で40万部も売れた理由」『文芸春秋SPECIAL』2014年秋号、が簡潔に紹介している。

2）たとえば、P・クルーグマン『格差はつくられた』三上義一訳、早川書房、2008年、原著は2007年、J･E･ステグリッツ『世界の99％を貧困にする経済学』 楡井浩一・峰村俊哉訳、徳間書店、2012年、小林由美『超・格差社会アメリカの真実』文春文庫、2009年、初出は日経BP、2006年。

3）たとえば､伊東光晴「誤読･誤謬･エトセトラ」『世界』2015年３月号、M･フェルドシュタイン｢税金データからの推計には限界がある｣『中央公論』2015年４月号、等。

4）池上彰「特別対談　本当に伝えたかったのは何だったのですか」『ダイヤモンド』(「そうだったのか！ピケティ『21世紀の資本』」) 2015年２月14日号、35－36ページ。

5）たとえば、「ピケティ狂騒曲　ブームの賞味期限」『日本版ニューズウイーク』2015年２月24日号。

支部だより

東京支部

１．理事会の活動状況

平成27年６月１日（月）午後７時から学士会館306号室にて、本年度第２回目の理事会を今年度理事候補者も含めて15名の参加にて開催しました。理事会では、７月総会の準備状況を報告し、提出する議案内容を確認しました。

２．新卒者歓迎会について

４月11日（土）午後３時より、銀座のchairsにて第５回の「新卒者歓迎会」を開催しました。当日は、関東地区に配属された卒業生を中心に、昨年の16人を上回る22名の卒業生の参加がありました（総参加39名）。

今回はスペシャルゲストとして三井住友海上火災保険の元会長・秦喜秋氏（東京支部副支部長）に「新卒から会長、そして現在に至るまでの歩みを知ろう！！」という題で講演していただき、その後は、テーブルごとに分かれて、池田前支部長差し入れのアサヒビールを飲みながら、過去にこの歓迎会に出席したことのある平成24年、平成25年の卒業生を中心に社会人としての先輩から、仕事への取り組み内容、会社生活、東京生活等についての盛りだくさんの意見交換とアドバイスを行いました。また、二次会でも新たな参加者を迎え、引き続き、交流を深めました。

３．東京支部総会・懇親会について

今年も７月７日に東京・神田神保町にある「学士会館」にて、90名を超える出席者を得て経済学部同窓会東京支部の総会と懇親会を開催しました。

総会では、新しく６名の方に理事に就任いただきました。なお、総会では、決算と予算に関し、経費の削減を図るとともに、新卒歓迎会、懇親会、二次会における応分の会費負担のご協力をお願いしております。

総会後は、記念講演として、今年度経済学研究院長に就任された磯谷明徳教授に「ピケティ『21世紀の資本』を読み解く」と題して、昨年から話題の本の内容をわかり易く紹介いただきました。

７時過ぎからの懇親会では、籾井支部長挨拶、磯谷研究院長挨拶に続き、出席された名誉教授・現役教員の紹介、来賓紹介がありました。秦副支部長の乾杯の後は、９つのテーブルに分かれて、参加者各自の自己紹介（テーブルスピーチ）を行い、今年の新卒者の紹介などを行いました。

恒例の宮崎誠二さんの指揮で「松原に」を全員で

歌い閉会しました。

その後日本教育会館の「喜山倶楽部」で開催された二次会では、遅れて参加した新卒者などを交え、終了時まで楽しんでいただきました。

4．九大東京同窓会Summer Festa 2015

毎年恒例になった九大東京同窓会主催の「Summer Festa 2015」が「もっと知ろう九大を、支えよう九大を」をテーマに８月29日（土）午後５時30分から青山ダイヤモンドホールで開催されました。

九大東京同窓会は、昨年創立10周年を迎えており、就活の支援、九大同窓生との産学連携に取り組んでいます。当日は、同窓会と母校の取り組みがオープニングムービーにて紹介された後、東京同窓会籾井会長（経済学部同窓会東京支部長）が挨拶されました。

来賓代表として、大学の広報担当理事の山縣由美子様の挨拶、元内閣官房副長官の古川貞次郎氏（法学部ＯＢ）の乾杯のあいさつのあと、星座別に割り当てられたテーブルごとに出席者の自己紹介となりました。

会場には、浴衣姿の卒業生が多数みられ、博多山笠にちなんだ九州大学「伊都流」の曳山もどきの展示や追い山をイメージしたアトラクション、Ｑ大クイズなどで全学部からの300名を超える多数の参加者も盛り上がりました。最後は、杉事務局長（経済学部同窓会東京支部副支部長）の「博多手一本」で締められました。

【東京支部事務局長　吉元　利行　1978（昭和53）年卒】

関西支部

関西支部では、毎年５月に見学会を実施しています。昨年は、羽曳野市にある「河内ワイナリー」でした。今年は、５月16日（土）に神戸市灘区の「兵庫県立美術館」と神戸市東灘区の「櫻正宗記念館」を見学しました。午前10時に、22名が集合場所の阪神電鉄「岩屋駅」に集まりました。前日からの雨が心配でしたが、当日は集合時刻には雨も止み、散策には最適な天候となりました。

歩いて約15分で兵庫県立博物館に到着、日本画家、堀文子展を鑑賞しました。堀さん自身の言葉「一所不住･旅」をテーマとし、飽くなき好奇心と探求心で歩んできた足跡に沿いながら、80年に及ぶ画業を回顧し、初期の作品から最新作までおよそ130点が展示され、堀文子さんの芸術、そして人間像に迫るものです。

まず、ボランティアの学芸員の方から堀文子さんについての来歴及び主な作品をスライドでご説明いただきました。そのあと、1918（大正７）年生まれ、現在96歳で今なお制作活動を続けられている、堀文子さんの一生の作品を鑑賞して回りました。鑑賞時間は約50分とやや急ぎ足でしたが、直接実際の絵を見ると、その時その時を懸命に生きられた堀さんのエネルギーの大きさを感じました。そして、新しい事に挑戦し、新しい事を知り、新しい事を感じる大切さと、いつからでもできることの勇気をもらいました。

11時半に兵庫県立美術館を後にして、次は楽しみの懇親会です。阪神電鉄で「魚崎駅」まで移動して、12時半までには、日本酒の名門酒蔵の一つ、創業400年の歴史を有する櫻正宗の「櫻正宗記念館 櫻宴」に再び全員23名が集合しました。懇親会は小森田憲繁支部長の挨拶のあと、懇親会から出席した今回最年長の逸見萬丈先輩（昭和32年卒）の乾杯の発声で始まりました。酒蔵ならではのスープの約半分に

日本酒を使用したオリジナルのお鍋など、美味しい料理と沢山の日本酒をいただきました。皆さんが心地よくなったころ、前支部長の石橋英治顧問（昭和36年卒）から締めの挨拶、最後に佐野壬彦先輩（昭和38年卒）の指揮のもと、学生歌『松原に』を全員で斉唱。会場は大いに盛り上がり、午後2時半に懇親会はお開きとなりました。

今回の幹事役である佐藤敏弘先輩（昭和50年卒）のお蔭で大変楽しいひとときを過ごすことができました。ありがとうございました。

報告者：理事 谷村　信彦　（平成３年卒）

関西支部の今年の行事予定は、11月14日（土）野外勉強会（大阪城公園と歴史博物館）です。

参加ご希望の方は遠慮なく事務局までご連絡ください。

関西支部事務局長 中野 光男（昭和50年卒）
富士精版印刷㈱ 管理本部気付 TEL06-6394-1182
E-mail : m-nakano@fujiseihan.co.jp

田口 廣則さん（昭和37年卒）がご逝去

経済学部同窓会に多大の貢献をされた田口　廣則さんが、去る６月25日に逝去されました。享年75歳でした。

東京、福岡に先駆け、昭和51年に発足した同窓会関西支部で、発足当初から役員として関わり、同窓会本部との橋渡しも含め、まさに同窓会の縁の下の力持ちを演じていただきました。

昭和37年に経済学部を卒業後、新日本製鐵（現・新日鐵住金）に就職されましたが、ラドン関係の会社を興されたのを機に、温泉関係の仕事をライフワークとされ、英彦山湯～遊～共和国や船小屋共和国の国王を任じ、地域おこし町おこしに没頭されたことは諸先輩はじめ多くの同窓生が知るところであります。

また、同窓会関西支部総会では、「半世紀の握手」や「お楽しみ福引大会」を主導するなど、記憶に残るようなユニークな発想と行動力で、同窓会活動の活性化に寄与されたことは万人が認めるところであります。

亡くなられる２週間前に関西支部前支部長の石橋 英治氏とその前の支部長の檀 豊隆氏が、たまたまお見舞いに病院に訪れた際、握手をしながらすごい力で握り返されたのが想い出深い別れとなったそうです。

ご先祖が眠られる熊本県の天草にて永眠されるとのことでした。謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（文責：関西支部事務局長・中野　光男）

福岡支部

1．第58回交流ゴルフ会、10組38名の参加で大盛況！

平成９年卒の三上です。２回目の参加です。ゴルフはあまり得意ではありませんが、前回、福岡に転勤になったことをきっかけに参加しました。同窓生ならではのアットホームな雰囲気もあって、前回に続いて５月17日（日）の第58回交流ゴルフ会に参加しました。

今回は、前回から更に２組増え、10組38名でのコンペとなりましたが、特記事項は、福岡市の貞刈厚仁副市長（Ｓ52卒、福岡支部副支部長）の参加をいただいたことと、若手の参加者が増えたことです。

優勝は、初参加の鶴田弘人さん（Ｈ７卒）。スコアはグロス91、ネット71.8でした。平成以降の卒業生としては、初めての優勝だと聞きました。

表彰式では、貫正義同窓会長、花田寛さん（Ｓ46卒）、木村博さん（Ｓ58卒）から賞品をご提供いただき、参加費からの賞品も合わせ、たくさんの賞品授与があり盛り上がりました。私は、三井物産那覇支店長・木村さんからの賞品（沖縄の「アグー豚」）を密かに狙っていましたが、外れました（残念！）。

参加者も昭和26年卒～平成９年卒と幅広い年代に広がっていることから、会員相互の懇親を大いに深めた後、最後に貫会長の万歳三唱で解散となりました。

次回のゴルフ会は次のとおりです。大変雰囲気の良いコンペですので、地元でお勤めの方はもちろん、転勤等で福岡に戻ってこられた方、偶々帰郷された方等奮ってご参加ください。

【三上　晃一　1997(平成9)年卒】

第59回交流ゴルフ会を11月29日（日）に開催

福岡支部では、第59回交流ゴルフ会を11月29日（日）、糸島市・伊都ゴルフ倶楽部にて開催いたします。

当日は第１組８時４分スタートで、15組予約済です。

廉価で同窓生相集い和気藹々と、をモットーに、プレー代は同ゴルフ倶楽部理事長である貫正義同窓会長（兼福岡支部長、九州電力㈱会長）が同倶楽部と交渉され、日曜日であるにもかかわらず、格安の13,000円（昼食・キャディ・カート・税込、別途会費3,000円必要）にて開催いたします。

登録会員の皆様へはメールまたは往復ハガキにてご案内いたしますが、登録されておられない同窓会員の皆様のご参加も大歓迎です。

お問い合わせ、お申し込みは福岡支部事務局長　平井（九州経済連合会TEL（092）761-4261　FAX（092）724-2102　hirai@kyukeiren.or.jp）宛お願いいたします。

「伊都ゴルフ倶楽部」（糸島市香力474　TEL（092）322-5031、ホームページhttp://www.ito-gc.com）

２．同窓生など160名が相集い福岡支部総会を開催

福岡支部では6月12日（金）、本年度の総会を開催しました。昨年までハイアットリージェンシー福岡で開催していましたが、今年はホテルオークラ福岡に会場を変え、総会・特別講演会には100名、懇親パーティには160名が参加しました。

総会では平成26年度事業報告・収支決算報告、平成27年度事業計画案・収支予算案、役員一部改選案のいずれも原案通り承認されました。これにより吉井勝敏副支部長が退任し、新たに髙木直人副支部長（九州経済調査協会理事長、昭和57年卒）が就任しました。

次いで特別講演会が開催され、貫正義同窓会長（福岡支部長、九州電力会長、昭和43年卒）が、「電気事業をめぐる課題」のテーマで講演。原子力再稼働、電力会社の収支・財務状況、再生可能エネルギー、地球温暖化対策における原子力の役割、電力システム改革等について分かりやすく説明をいただきました。

その後、懇親パーティを開催。田中教雄法学研究院長や市村昭三先生、原田溥先生、兒玉正憲先生、逢坂充先生、福留久大先生という懐かしい名誉教授の方々、今年４月に研究院長にご就任の磯谷明徳先生をはじめ現職の先生方、東京支部の秦喜秋副支部長・杉哲男副支部長・吉元利行事務局長、関西支部の石橋英治顧問（前支部長）、中野光男事務局長、福岡支部の貫支部長（同窓会長）・光富彰副支部長・貞刈厚仁副支部長・髙木直人副支部長をはじめ同窓生が相集い、懇親の輪を広げました。途中、女性卒業生の会「松の実会」のご挨拶があり、最後は学生歌「松原に」を全員で合唱し、貫同窓会長、貞刈副支部長、髙木副支部長による博多手一本が入り、来年の再会を期しました。

特別講演会

３．「水素エネルギーがもたらす産業と社会のパラダイムシフト」 工学研究院　佐々木一成教授を招き６月サロン会を開催

福岡支部では６月26日（金）、サロン会を福岡市・九経連会議室で開催しました。今回は工学研究院の佐々木一成教授をお招きし、「水素エネルギーがもたらす産業と社会のパラダイムシフト」のテーマで講話をいただき、９名が出席しました。

佐々木先生からは、「①エネルギーと水素」「②燃料電池・水素エネルギー技術の現状」「③将来展望『水素社会』はどのような社会か？『水素社会』は実現できるか？将来のエネルギーはどうあるべきか？大学は社会にどのように貢献できるか？」というような多彩な内容で講話をいただきました。

途中、水素を作って発電！ということで、高校時代以来久しぶりの実験も経験。水を、太陽光に見立てた灯光器により電気分解して水素を製造し、モータープロペラの回転を見せていただきました。

講演終了後は九経連近隣の居酒屋に場所を変えて懇親会を開催。佐々木先生を交え、水素エネルギーの産業化等について熱心に質疑を交わしながら、もつ鍋を囲みました。

４．恒例のアサヒビール博多工場見学会・アサヒビール園交流会を開催～サロン会７月例会

今や福岡支部の夏の恒例行事となったアサヒビール博多工場見学会とアサヒビール園交流会を７月24日（金）に開催しました。

今回は見学会参加者が４名、交流会が５名と少なかったのですが、見学会には水上鎮真氏（昭和47年卒）、事務局の平井に加え、大学から小室理恵先生、潮崎智美先生にご参加いただきました。続く交流会には、毎年ご参加いただいている福留久大名誉教授にもご参加いただきました。

アサヒビール博多工場は、通常は平日の昼間のみ操業していますが、夏のこの時期だけは夜間も操業しているため、池田弘一・元アサヒビール会長が同窓会長にご就任の頃からの福岡支部の恒例行事となった次第です。

今年は参加者が少なく、やや寂しかった７月例会ですが、来年以降も毎年続けてまいりますので、同窓生の皆様のご参加をお待ちしております。

【福岡支部事務局長　平井　彰　1980（昭和55）年卒】

同窓生健筆模様

『国際相続の法務と税務』について

税理士法人 東京クロスボーダーズ
羽根　由理子氏
1984（昭和59）年卒

１．初めに

九大経済学部の同窓会報に税法、特に相続税に関する本の紹介をするなんて初めてのことではないだろうか？

在学時代は、木下悦二先生のゼミに在籍させていただいた。卒業後、会計事務所に就職し、税理士の資格を取得した。その後この分野でなんとか生活の糧を得ている。

この本は、国際相続に関する法務的な手続きを弁護士酒井ひとみ先生が執筆し、日本における国際相続の相続税・贈与税の取扱を私が執筆した（本の著者名は、私が参画している税理士法人名）。

一般に、国際相続とは、日本にある財産を所有する外国人または、海外に住む日本人（国籍を有する個人）を被相続人とする相続をいう。近年国際相続の本が盛んに出版されるようになった背景には、本書のなかで酒井弁護士が指摘しているように、人、モノ、カネのボーダレス化により「個人」レベルの国際化の進展がある。居留外国人統計では、1990年（平成２年）の登録者は1,075,317名であったものが、2011年（平成23年）には、2,078,508名となり約２倍に増加した。海外在留邦人数も同様に620,174名（1990年）から、1,182,557名（2011年）とこちらも、約２倍に増えている（pp.64-65）。こうした人（自然人）の行き来の増大には、日本企業の海外進出と、外国企業の日本への進出が大きく寄与している。

税務研究会出版局
２０１４年12月刊行

たとえば、同じ木下ゼミで学んだ藤本賢吾氏は、中国の方と結婚され、今では、毎年日本と中国を往復し、中国人の岳父母と交流を深めているとのこと

である。こうした家族関係が多くなるについて、国際相続の事案が増大していく。人の交流が多くなるにつれ、国際相続の発生数が増えるのは自然のことである。

西安市大慈恩寺にて友人と
2014年８月

しかし、税務の世界で、国際相続に関心が集まったのは、それだけではない。1990年（平成２年）ごろより、国内財産を海外に持ち出すことにより、あるいは、子・孫等を日本から海外へ脱出させれば、彼らは日本に住所がない者となり日本の高率な相続税・贈与税を避けられるという相続対策が議論されるようになり、実際に、富裕層のなかで徐々に実行され始めたのである。

２．国際相続の要・・・住所の判定

国際相続における日本の相続税の納税義務を確認する中で、最も重要なことの一つに、被相続人と相続人の住所が日本にあるかどうかという問題がある。2000年（平成12年）以前は、日本に住所がない個人が相続した国外財産は、相続税・贈与税の納税義務はなかったため、たまたま、オーナ―企業が海外進出し、海外に製造子会社や販売子会社を設立し、そこに事業承継者である社長の息子が子会社社長として赴任したり、あるいは、武者修行として、海外の提携先企業に出向中に、たまたま、そのオーナー社長が海外投資資産として保有していた米国債なんかを贈与するというのは、ごく、普通の相続対策であった。

ただし、行き過ぎた相続対策は、税務当局との意見の相違の引き金となる。経済的な必然性がなく、節税だけを目的として息子を海外武者修行に出し、その修行中に親の海外財産を贈与することにより、贈与税及び将来の相続税を不当に軽減させるようなケースについては、のちに、いくつもの税務訴訟の対象となり、いずれも「個人の住所」に関する様々な事実をもとに裁判所がその個人の住所がどこにあったかの判断を示すことになった。

現在では、法改正により、日本国籍を有する者については、たとえ海外に住んでいたとしても、相続人または被相続人のどちらかがその相続開始以前５年以内に日本に住んでいたことがあれば、日本に住んでいる者と同様に相続税・贈与税が課税されるので、上記のような節税対策はすっかり影をひそめてしまったが、国際相続を扱うにあたって、外国人の場合、あるいは長年海外に親子で住んでいる日本人の場合には、この「住所」がどこにあったかは、今でも重要である。

本書では、1997年ごろに行われた２つの海外武者修行中の贈与に対して国税当局が否認した事案について、それぞれの地裁審理中に確認された武者修行中の「事実」を整理し、それに基づいて、地裁・最高裁が示した「住所」の考え方をまとめた（pp. 72-80）。

「住所」の定義は、民法では、「各人の生活の本拠」と定めている。「生活の本拠」をどう判断するのかは、事実に基づく。実務家として、裁判所が、どのような事実をもとに「生活の本拠」を判断するのかを確認することは、興味深い作業であった。

３．海外の相続と相続税を知ること

この本には、参考としていくつかの国の相続法と相続税法の概要を紹介した。いずれも、その国の実務家に協力を求め、彼らが日常携わっている相続法・相続税法の概要を彼らの言葉で説明したものを日本語訳にして掲載した。仕事の上で、日本の顧客の代理人として、海外の会計事務所に質問することがよくある。制度等が似ている場合には、日本からの質問についてもすぐに回答が返ってくる。ところが、同じような会計・税の制度でありながら、「なにか」が違うと、質問の意図・意味が伝わらず、回答がなかなか得られない場合がある。相続税ではないが、日本の会社の経理担当者が、シンガポール子会社が負担したシンガポールの消費税であるＧＳＴの還付について質問する場合、「還付を受けるためには、仮払ＧＳＴは、帳簿に仮払ＧＳＴとして経理しておかなければならないか？」と尋ねる。尋ねられたシンガポールの会計事務所の担当者は、なぜそこで帳簿がでてくるのか首をひねる。なぜならＧＳＴはインボイス方式であるので、日本の帳簿方式の消費税の還付と異なり、帳簿は要件ではないからである。

こうした会計･税制という「制度」の違いについて、すべて国の制度を知ることは不可能であるが、相手の疑問を理解し、スムーズな意見交換を行うためにはとても重要である。

４．世界と税・・・

税務の世界では、昨年より、①国外財産調書制度として12月31日現在の一定金額以上の国外財産を保有している日本居住者について、その明細を確定申告書に添付して提出することが義務づけられた。②今年2015年７月１日からは、日本居住者が海外へ移転する際に、その保有していた有価証券に含み益がある場合には、譲渡益相当を一旦申告納付しなければならないという「国外転出課税制度」も開始された。また、今後、③日本の金融機関に対して非居住者にかかる金融口座情報の報告制度の整備も進められている。こうした日本の課税環境に関する整備は、日本の国税当局単独で行われているわけではなく、特に③については、2013年よりＯＥＣＤ租税委員会が推進しているＢＥＰＳ（税源浸食と利益移転）行動計画の一環であると位置づけられている。「ＢＥＰＳ行動計画」とは、多国籍企業等が、グループ関連者間における国際取引により、その所得を高課税の法的管轄から無税又は低課税の法的管轄に移転させることで、国際的二重非課税を生じさせるものに対して、各国が協調して対策を講じようとしているものだ。世界経済を動かす多国籍企業vs各国国税当局連合軍の戦いとも言える。実務家としては、この戦いの中で税制改正が行われ解釈指針の変更がおこなわれるので、その戦いの行方を見守っていかざるをない。ＢＥＰＳ（税源浸食と利益移転）発端というべき事例として、2012年に英国でスターバックス社が多額の追加納税をせざるをえなかった事例がある。また、2015年10月１日から「国境を越えた役務の提供に対する消費税の課税制度の見直し」は、日本におけるアマゾン社への対応といわれている。

５．九大・木下ゼミで学びつつあること

木下先生とは、毎年、年賀状等の交換を通じてちょっとだけ交流をさせていただいている。時折、先生の書かれた論文を拝読させていただく機会がある。2011年の「世界経済評論」誌で拝見した先生の論文には、会計事務所のＢＰＯ（Business Process Outsourcing）業務について言及されており、まるで長年会計事務所にいらっしゃったかのような適切な表現で簡潔に述べられている文章に驚きをおぼえ、思わず、「どうしてわかるんですか？」と年賀状に書いたことを覚えている。先生からは、後日丁寧なお葉書をいただき、書斎のなかから世界経済の動きと、その変化・動きのなかにある真理を発見することを日々の楽しみにされておられるように感じた。

そういった先生の著書や論文等を読みかえすと、まずは、「事実」のなかで何が重要であるか？その事実はどういった意味をもち、どういった影響にあるのか？等を考え、その積み重ねで、経済社会の変化・動きのなかにある真理を発見されておられる。最近、これは、実務家としてもとても重要な「ノウハウ」ではないかと思えるようになった。

先生の温かいお人柄のせいか、いまでも木下ゼミ東京ゼミ会は、不定期ながらも行われている（らしい）。今回の原稿の参考とすべく、近況をもとめるメールをしたところ、数人より快く情報提供していただいた。

『石炭産業論 矢田俊文著作集 第一巻』

2014年２月 釧路コールマイン（石炭鉱山）見学

熊本大学法学部教授・
環境安全センター長
外川　健一氏
1992（平成4）年博士入

まず、簡単に自己紹介させてください。私は浪人したのち、昭和59年に九州大学薬学部に辛うじて入学し、卒業後薬剤師の資格を取得し、そのまま薬学研究科の修士課程に入学しましたが、思い切って進路を変更し、平成２年に大学院経済学研究科経済工学専攻修士課程に入学し、矢田俊文先生の下で環境問題とくに廃棄物リサイクル問題の経済地理学的分析を学びました。

私は薬学研究科の修士課程の１年生のころ、このまま製薬化学業界で新薬の開発を将来の仕事にするのか、それとも高校の理科の教師になろうか等、そ

の時になって初めて将来を真剣に考えた典型的なバブル期のモラトリアム人間でした。しかし、自分が本当にやりたいことは何なのか、改めて考えるなかで、やはり自分は実験室に籠って、モノを創ったりする研究よりも、どこかに出かけ自分の目で社会を見つめ直す研究をしたいという気持ちが脈々と芽生えてきました。そこで、私は全国の地理学関係の大学および関係者についてリサーチをはじめました。（当時はインターネットなどまだ一般には普及していなかった時代で、図書館に行って、全国の地理学研究者の業績や大学院の状況を調べました。）

するとまさに「灯台下暗し」というべきか、同じ九州大学に私が研究したい内容（資源・エネルギー論）を専攻されている地理学の先生がいらっしゃったのです。それが他ならぬ矢田俊文先生でした。初対面の矢田先生の印象は強烈でした。「地誌学（だけで）はダメだ。経済理論に基づいた体系的な地理学を学びなさい」。このアドバイスは強い印象として残っています。そして、その時に矢田先生から「この私の昔書いた本をあげるから、読んでごらんなさい。」と渡されたのが、今回刊行された『矢田俊文著作集　第一巻　石炭産業論』に収められている『戦後日本の石炭産業－その崩壊と資源の放棄－』1975年、新評論、でした。結果的にこの本は私のバイブルになります。20代の私、30代の私、40代の私、そして現在の私。いつ読んでもこの著作は、経済地理学の面白さの原点を私に思い出させてくれるのです。

2014年５月名古屋大学で開催された経済地理学会第61回大会の共通論題は、「経済地理学と自然」でした。そこで、私は矢田先生がかつてテーマとして取り上げた「エネルギー源としての石炭」を意識しながらも、2007年頃から急に注目を浴び始めた「レアメタル・レアアース問題」や、最近注目を浴びてきた生物多様性問題をテーマに、「環境と資源－主として鉱物資源、生物多様性を中心に」という題目で報告を行いました。この報告では、「新しい資源ナショナリズム」をキーワードに、今世紀に入って著しい鉱物資源メジャーの台頭の背景を説明し、我が国における優れた既存のインフラストラクチュアである精錬施設を、さらに積極活用する意義を報告しました。また、生物多様性問題の中核は、遺伝資源に関する「新しい資源ナショナリズム」の問題であることを強調し、製薬業界を中心とした先進国の取り組みを紹介しました。しかし、私の拙い報告に対してフロアから矢田先生の鋭い、しかし温かいコメントが届いたのです。

「いろいろな世界的な貿易の話や国際関係を分析するのも資源論だが、むしろ経済地理でやるなら自然の対象とする鉱物そのものの存在形態、要するにどれぐらいの層になぜ発生するかとか，なぜ金がそこにあってそれをどう利用するか、もうひとつ前の、地球上に存在する鉱物そのものの有り様と資源との関係まで行かないと、高校の教科書にある商品貿易の話でいくらでもできるのではないか。あるいは地域文化との関わり、地域の多様性との関係で資源をどう見るか、そこまでいかないと経済地理学としての奥深さを感じとれない。個人的には、あまりこれまでの研究と方法論的には変わっていないのではないかと思った。私も石炭のとき、ほとんど地質構造のところから、石炭の既存条件の多様性から解き明かした。鉱物資源や生物多様性の問題に関してもそこまでいくことに経済地理の面白さがあると思う。」

まさに目から鱗のコメントでした。私は矢田先生の石炭産業の著作からいったい何を学んできたのだろうか？と、心の底から恥ずかしくなりました。

矢田先生は今回紹介する著作集の81 ～ 131ページにおいて、「合理化・崩壊期における石炭生産配置の展開」を丁寧に説明されています。矢田先生の分析は極めて明快で、明治以来1960年代まで、三井、三菱、住友、北炭の財閥系大資本が、炭質、炭量および賦存状況の優れた三池、高島、石狩、釧路の四炭田を早くから独占し、差額地代分を利潤源泉としてきたというものです。実際、この分析に従って、炭量、炭質、層厚、歩留まりのいずれにおいても最も優良な炭田だった三池が、三井によって1997年まで生産を続けたこと、特殊炭皆無で、硫黄分の少ない環境面で優れている石炭を産出する釧路が、いったん閉山した後も「釧路コールマイン」として規模を縮小しながらも再出発して稼働し続けていることが証明されるのです。（私のプロフィル写真は2014年現在もしっかり操業している釧路コールマインでの見学時のものです。）

矢田先生は大学院修士課程在学中にほぼ独学で石炭地質の本を読み、東京大学工学部鉱山学科の講義で炭鉱開発論について学んだと聞いています。そして夏休みの約１ヶ月間、常磐炭鉱の労働組合の宿舎に宿泊し、湯本にある磐城鉱業所、中郷にある茨城鉱業所の坑内に入り、採炭現場を見学したそうです。さらに博士後期課程進学後は、フィールドを北海道や九州の主要炭鉱にまで広げ、日本の石炭産業のスクラップ・アンド・ビルトの実情を生で体験しつつ、冷静な分析を進められたのです。

この著作集では、若き日の矢田先生の日本の石炭産業に対する熱き思いを読むことができると同時に、九大教授就任以降、石炭鉱業審議会の専門委員、さらに産炭地域振興審議会委員を務められ、日本の石炭産業のソフト・ランディングについて、幾分クールな分析視角に転じた（というのは、私の読み違えかも知れませんが）矢田先生の論文も同時に収録されています。

なお、『矢田俊文著作集』は現在も半年に１冊のペースで刊行中です。本著作集は、マックス・ウェーバーが『職業としての学問』で記した、「学問における俗の世界」から、ほぼ解放された矢田先生自らにより（６人の矢田先生から教えを受けた研究者が編集委員会を作って、お手伝いはさせていただいていますが）、ここで紹介した『第一巻　石炭産業論』に続いて、『第二巻　地域構造論　上』（解題は東京大学大学院の松原　宏教授が、実に丁寧に同書掲載論文を体系的に整理されています）『第二巻　地域構造論　下』（解題は、九州大学経済学部ＯＢでもあり、矢田先生のゼミで私とほぼ同期として仲良く付き合ってくれた、北九州市立大学の田村大樹教授が担当しています。田村教授の解題は、矢田先生の教育者としての温かくユーモアあふれるエピソードも書かれています）が、すでに刊行されています。矢田先生は引き続き『第三巻　国土政策論』の執筆に集中されているとうかがっています。事実、2015年７月の経済地理学会西南支部会（於　広島大学霞キャンパス）では、ますます研究意欲に燃える矢田先生の「国土政策論」に関する中間報告をうかがい、参加者との議論を心から楽しんでおられるようでした。どうか矢田先生、お体をおいといいただき、引き続き私ども後進に経済地理学の魅力を綴り、語り続けてください。

リレー随想

ある日の向坂先生

九州大学名誉教授
大屋　祐雪氏
1951（昭和26）年卒

あれはいつのことだろう。熊本にいた頃のことであるから、たぶん1960年前後の安保・三池のころであるように思う。南九州へ行かれるときには、よく熊本に立寄られていた。そのときのお宿がどこだったか、いま想い出そうとしても思い出せない。

時候も月もさだかでないが、ある日、「熊本に行くので、時間がとれれば出てきませんか」という連絡をいただいた。連絡役は、いつも、杢田さんである。彼は当時、電産労組の役員で、熊本での資本論研究会のメンバーの一人であった。

お宿を訪ねたら、東京の相原茂先生が御一緒だった。川口武彦さんが同道されていたかどうかは記憶にない。杢田さんに車を都合してもらい、中谷哲郎君と一緒に花岡山に登り、そのあと武蔵塚まで行った。花岡山からは熊本市が一望の下にあり、金峰山の指呼の間にある。花岡山では、先生が五高の学生時代、漱石の『草枕』にひかれて、小天に行き、漱石が泊まった小さな温泉宿を訪ねられ、一泊された話など、実に楽しそうに、そのころの思い出を語られた。

山を下り、白川沿いに大津街道を行く。幕藩体制下、細川侯が参勤交代で行き来していた街道である。この街道には、熊本城からの里程を示す一里石、二里石という台石が置かれている。武蔵塚は何里ほどのところにあったろうか。塚に建てられている案内板には、この塚の由来が物語風に書かれている。

ふっと、脳裏を横切ったのは、先生と武蔵の出合いの図である。私は中学校時代、吉川英治の『宮本武蔵』を学期試験中に読み耽り、思わぬ成績で叱られたことがある。お通さんよりも又八がかわいそうであった。

一度お尋ねしようと思っていたことでもあり、いたずら心も手伝って、「先生、いま武蔵が出てきたら、どうされますか」と声に出してみた。間髪を入れず、「そのときは闘うよ」というお声が返ってきた。期待通りのお答であった。武蔵とでも闘う、というすさまじい気魄、それが理論闘争における先生の姿勢であると、いまさらながら、『日本資本主義の諸問題』や『地代論研究』にみられる論争のきびしさが思い出された。真理の前には一切の妥協は無い、という先生の強い信念に接した思いであった。

その夜、先生と相原先生を囲んで、九大出身の数名が夕食をともにした。先生と中谷君をのぞくと、他の者はそれぞれに愛酒家だったから、適当に飲み、酒の勢いも加わって、駄洒落などもとび交うさまであった。ことに相原先生は「東京の人」だけに、お話の一言一言が洒脱で、ある種の文化のにおいさえ味う感じであった。「資本主義は無駄の世界だからね。経済学者はすべからく無駄の研究に取り組まんといかんね。私もこれからそれをやろうと思う。みんなでひとつ科研費でもとりますかね」。言葉が終るやいなや、先生は、たいへんきびしいまなざしで、「たしかに資本主義は無駄の社会だよ。だからといって、君がなんでそんな研究に貴重な時間を費す必要があるのかね。君にはまだまだやってもらわねばならないことが山ほどある。だいたい君は才能にめぐまれながら、酒がすっかり君を駄目にしている。九大のM君だってそうだ。酒を飲まなければできないような学問なら、そういう学問はやらんほうがいい」。

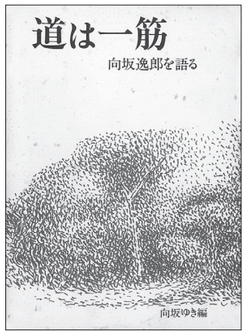
そのとき武蔵と対決する先生を再びそこにみた。

「怠惰な勉学は、怠惰を学ぶに等しい」という先生の色紙を、畏友安藤次郎さんから分けていただいた。御存命中に一枚いただいておけばよかったとつくづく思う昨今である。

安藤さんもすでに古希をお迎えであろうから、先生との御親交は50年にも及ぶと思う。本誌を借りて、安藤さんの詩をここで掲げておく。

向坂先生気骨人　深学馬列愛平民
書逢知己千巻少　偶有小閑披画巻
工人志学挺身教　東奔西走忘老至
受業同志散全国　喚起工農千百萬
雖知老師拒酒烟　請恕挙杯賀傘寿

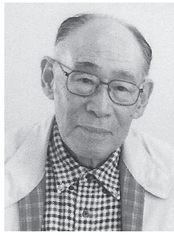
（向坂先生は気骨の人なり　深くマルクス・レーニンを学んで平民を愛す　書は知己に逢えば千巻も少しとし　たまたま小閑あれば画巻をひらく　工人学に志せば身を挺して教え　東奔西走して老いの至るを忘る　受業同志は全国に散らばり　工農を喚起すること千百萬なり　老師は酒烟を拒むを知るといえども　請う杯を挙げて傘寿を賀すを恕せ）



［編集部註記］1985年１月22日に他界された向坂逸郎先生の追悼文集、向坂ゆき編『道は一筋――向坂逸郎を語る』（社会主義協会出版局、1989年刊）所収の一文に若干加筆されたものを収録いたしました。

リレー随想

わが人生と広がる交友の輪



井上　俊二氏
1957（昭和32）年卒

「通学、卒業、そして」

平成９年２月、サラリーマン生活に終止符を打った。昭和32年、三菱信託銀行（現三菱ＵＦＪ信託銀行）に入社、平成元年に三菱商事と合弁の菱信リース（現三菱ＵＦＪリース）に移り８年、通算41年のサラリーマン生活であった。後半は高度成長期、バブルの時代の仕事であっただけに、後輩からの退社挨拶には、後始末をしっかりやってくれて有難う、と返事に添えている。

遡って六本松の教養部時代、小倉からの遠距離汽車通学（当時は蒸気機関車）だったため遅刻が多かったが、昭和28年６月の大雨による鹿児島本線の不通を除き欠席はしなかった。ここでの思い出は、秀村先生の歴史講義で、これまでの歴史観を一掃していただいた。事象の根底にあるものから時代をみることの大切さを学んだ。

これまで２年だった教養部は１年半となり、学部では、銀行論、貨幣論、金融論に興味をもち、岡橋教授にはいろいろご指導に与った。

就職試験が始まる31年10月は、厳しい不況の波の中ではあったが、岡橋ゼミに参加していた私は、教授から「これからは信託は面白いと思う。君の先輩を知っているから訪ねてごらんなさい」と勧められた。当時は学部に企業から推薦依頼があり、三菱信託銀行に申込み、それから先輩を訪ねた。願書を出してからの企業訪問であった。

入社当時の信託銀行は、興業銀行や長期信用銀行と同じく基幹産業への資金供給面での役割が大きく、資金吸収面への注力は相当なものがあり、１年後には外務に変わった。

昭和30年代の後半に私にとってまさにカルチャーショックともいうべきことがあった。企業年金制度である。企業の福利厚生面での充実の一環として昭和38年から税制上認められたものであるが、その後厚生年金基金制度も認可された。超低金利時代への移行のことは擱くとして、保険会社とともに信託銀行の業務として、"制度全体"を信託銀行が受託することに大いに意欲をかきたてられた。

昭和32年３月 金融論ゼミ岡橋教授を囲んで
後列左より井上、平野、小山、伊藤、鶴
前列左より三角、教授、吉橋の各氏

昭和38年本店に移った私は、昭和39年から６年間、年金業務に携わり、企業の人事・経理・財務担当者と制度の採用にむけて議論を重ねる日々が続いた。私にとって最も充実した時代であった。

その後の支店勤務は昭和51年の仙台、57年の長崎両支店であるが、宮城県沖地震、長崎大水害を経験した。しかし気掛かりなのは、最近の災害が比べようがないほど規模が大きくなっていることである。

昭和54年仙台から東京に戻った私は、同じゼミの友人である伊藤匠氏が幹事を務めていた九友会に定例的に参加するようになった。東京九友会のことは、同窓会報第49号リレー随想で長尾磯夫氏が旧友交歓の状況を軽妙洒脱に紹介してくれている。氏の随想文にもあるように、みなさん集まれば、年々病気中心の話題が多くなり、医学部ＯＢの会合かと思われても仕方がないくらい皆さん病気に詳しい。長崎赴任中はご無沙汰したが昭和60年に復帰した。

「九州九友会のこと」

平成９年、母の介護のため北九州市の実家へ戻った私は、東京の会が懐かしく、九州でもと思い、卒業以来の友人を中心に輪を拡げ、それに東京の会に参加されていた方に連絡し、平成10年１月26日に九州九友会の最初の会合（小倉・礁）を開いた。総勢14名、手島、中村（直）、平賀、星隈、井上（正）、財津、篠原、畑迫、宇佐美、梅田、福間、原田（統）、則行の諸氏、それに私である。初回はまだ60代前半ということもあり、健康上の話は少なく、星隈氏が持参された教養部時代の授業プログラムや分校の話などが中心の話題であった。

爾来今年（平成27年１月16日）で18回目の九州九友会を開催（福岡・高井）したが、２回目以降の参加者は、青木（龍）、荒谷、江島、逢坂、富永、西（謙）の諸氏で、亡くなられた方は、畑迫、宇佐美、篠原、森山、西（謙）、そして昨年12月に亡くなられた平賀の６氏で、現在の会員数は16名、健康上何も悪いところがない"怪物"は皆無で、今年集まった９名の写真は後掲のとおりである。

近況報告ともなればやはり病気中心とならざるをえないが、過半数の方が何らかの癌とお付き合いしている。傘寿を越えると身体の軋みはいろいろあるにしても皆さん明るい。大野城市で自然環境保護の「もみじの森会」を主宰している名誉教授の逢坂氏もそのお一人だが、新年宴会のほかに「紅葉狩り」の話もあり、交友の機会が増えそうだ。当日お休みだった九工大名誉教授の原田（統）氏は、地元遠賀の名士でお忙しい。青木（龍）氏は社会福祉法人西日本至福会の理事長としてご活躍、スケジュールが重なった。汽車通学で一緒だった手島氏は交通事故に遭い外出が難しく寂しい。

「広がる交友の輪」

私が大切にしているグループとしてのお付き合いは、九友会の他に二つある。いずれも帰郷してからのものだが、一つ目は平成９年から10年続いた朝日カルチャーセンターでの九大名誉教授田村圓澄先生の古代（仏教）史講義の受講仲間である。最近では百済二十五代部寧王の生誕地・加唐島（呼子沖）を訪ね、朝鮮通信使が逗留した新宮沖の相島では地元の研究者のお話を伺った。四国お遍路では、同窓会報にも紹介された古文書解読を進めておられる松山市の田中貞輝氏の出迎えを受け旧交を温めた。

二つ目は、ボランティア活動を通じての仲間である。帰郷してすぐ平成９年６月から北九州市社会福祉協議会（市社協）が事業主体である送迎サービスの活動を始めた。このご縁で市社協、小倉南区社協の運営に関わるようになり、今日に及んでいる。そしてこの送迎ボランティアから約70名の社会福祉関連の活動を目的にしたボランティアグループを立上げ８年になる。

趣味のそば打ちも友人の輪をひろげているが、割愛しましょう。

以上のように私にとって平成９年は人生最大のターニングポイントといってよく、"年齢に比例"して友人の輪が広がり毎日の元気につながっていることに感謝したい。

「最後に東京九友会のこと」

先にも触れたが、東京九友会（会員25名、会長山本兼茂氏、幹事藤原澄人、高崎幸雄の両氏）の近況を報告しよう。東京の集まりは不定期ではあるが、年２回は開催されている。その都度長尾氏からレ

ポートを頂戴しているが、昨年11月の会合では、介護保険の話にポイントが移りつつあり、やはり東京は一歩先をいっているな一、と素直に感心していたら、今年５月15日の集まり（写真後掲）では一転前向きな発言に終始されたようで、いや二歩先をいっている、と報告してこのリレー随想を終わりたい。

九友会に興味を持たれた方のために連絡先を付記しておきます。

東京：〒206-0802　稲城市東長沼3104-1
稲城ガーデニア2-1201　藤原澄人
九州：〒802-0841　北九州市小倉南区北方1-12-37
井上俊二

九州九友会 新年宴会 2015.1.16
後列左より荒谷、福間、則行、井上
前列左より梅田、江島、逢坂、則津、中村の各氏

リレー随想

100回が視野に
――九大どげん会（S40経済学部卒）

林　俊一氏
1965（昭和40）年卒

（1）郷里の福岡にUターン

周囲の九州出身の友人知人の羨望の中、５年前、東京から郷里の福岡にUターンしてきた。九州出身者は生れ故郷への思い入れ（帰巣本能？）が特に強いと言われる。そうした中で、当人は故郷へのUターンを希望しながら、家族や周囲の事情で断念することになったという話は東京でもよく耳にした。その点、さしたる支障もなく、前々からの念願通り福岡に戻ってくることが出来た私は幸せ者と言えるだろう。学校卒業以来、東京をはじめ全国各地を転々としたあとの46年ぶりの帰郷であった。

ＮＨＫ籾井会長を囲んで 第90回どげん会 2015年５月15日「博多表邸」
前列左から：松永、高田、藤原（同窓会事務局）、籾井、帆足、井上
後列左から：稲石、林、檀、久保山、青木、椛島の各氏

福岡に戻った私が、真っ先にやらなければならない仕事は、それまでとかく疎遠になっていた地元福岡の友人知人との人間関係の再構築（交遊復活）であった。50年近いブランクを取り戻すのは簡単ではない。そうした私にとって、旧友と再会出来るありがたい機会のひとつが「どげん会」（正式名称：九大どげん会）であった。私は2010年11月の第72回「どげん会」（於：吉塚うなぎ本店）から参加することになった。以来毎回欠かさず出席している。

（2）「どげん会」の概況

「どげん会」は1993年（平成５年）に九大経済学部Ｓ40卒の福岡在住者が中心になってスタートした。会員は東京、名古屋、大阪在住者を含めて現在22名（このうち出席者は毎回15名前後）、会は３ヵ月毎に年4回開催（２月、５月、８月、11月）、幹事は持ち回りで会費は5,000円、幹事は場所（店）の設営がひと仕事だが、参加する者には毎回違った店の食べ歩き、飲み歩きが出来るのが楽しみでもある。

会長の青木君は博多山笠・大黒流の重鎮、事務局長の高田君は今も現役のマラソンランナーである。彼のおかげで、会員名簿や「どげん会」の開催記録など会の資料は完璧に整理されている。会のメンバーで言えば、思い切った発言で何かと話題の多いＮＨＫ会長の籾井君も、同じＳ40経済卒で「どげん会」のメンバーである。彼は義理堅く、忙しい仕事の合間を縫っては東京から駆け付けて来てくれる。豪放、ざっくばらんな彼の基本スタイルは学生の頃から変わらない。当然のことながら、我々「どげん会」のメンバーは彼の理解者であり、応援団であるが、一方では「もうし少し穏便に…」と彼の袖を後ろから引っ張るのも我々友人の務めでもある。

定刻、いつもの顔が揃ったところで会は始まる。

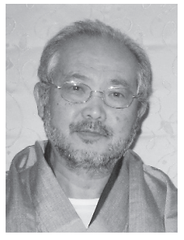
各自の近況報告も含めて発言は何でも自由、健康の話、家族の話、最近見聞したことや感じたこと、年令相応の失敗談などが次々と披露され、それに対するやりとりで話は弾む。我々は卒業して丁度50年、歩んできた道や現在の立場はそれぞれ違っても、共感することが多いのは、やはり同窓、同期の友だからであろう。以前に比べるとさすがに酒食の量は落ちたが、時間と共に盛り上った会話はいつまでも続く。飲み放題の時間制限があればそこでお開きになるが、納まらない面々はその後二次会へと向かう。

（3）100回が視野に「どげん会」

以上が「どげん会」の概況であるが、ここで特筆したいのは「どげん会」の開催回数である。既に90回を超え100回が視野に入ってきた。今のペースで行くと丁度2年後にはめでたく100回を迎えることになる。九大経済学部の数あるＯＢ会の中でも、100回という数字は他に例が無いのではないかと自負している次第である。100回記念をどうするかはいずれ「どげん会」の重要議題になるであろうが、願わくば全員元気でその日を迎え、盛大な祝賀会で一区切り後も更に回数を重ね、伝統ある「どげん会」をいつまでも続けていきたいというのが、我々メンバー全員の願いである。

リレー随想

広島からリレー通信



若松　重喜氏
1970（昭和45）年卒

わたしはＳ45年経済学科卒業の若松重喜と申します。九大経済学部同窓会報のリレー通信を寄稿するという思いがけない幸運をいただきまして感謝しております。きっかけは、前回号の感想をメールで事務局の方へ送ったことが縁となって、寄稿依頼をいただいたものです。大げさですが、天命と思い、勇気を出して、お引き受けいたしました。大学時代や社会人生活での思い出、そしてリタイア後の近況等をすこしだけ綴ってみたいと思います。

①ユトリロとの出会い；１年生になったばかりのころ、福岡で、ユトリロ展が開催されました。これが初デート。たまたま、今月、広島で、≪ユトリロとヴァラドン　母と子の物語≫展が開催されており、同じ二人で50年ぶりに、こんどは幼い孫たちを連れて、８月11日に行ってきました。ヴァラドンはユトリロの母であり画家であります。その母が子を描いた≪ユトリロの肖像画≫という絵を、家に帰ってからハガキサイズに模写して、一緒に観た思い出に、孫たちへそのハガキにメッセージをつけてポストしました。

②寮生活；１年生のときは田島寮でお世話になりました。６月だったか？田島寮祭があり、ミコシを担ぎました。電車みちをかついでワッショイワッショイやって練り歩き、あちこちからバケツで水をかけてもらったような？？ミコシをかついでいる写真があったはずだけど、学生時代の写真が手元にみつかりません、送りたかったのですが、ザンネン。田島寮での、飲み会のあとの≪ストーム（STORM）≫というあのはげしいギシキは強烈でした。いまも、やっているのでしょうか？禁止されているのかなあ？

③生涯勉強；化学の試験に、≪エントロピーとは何か？≫というのが出題されました。人生のいいテーマをいただいたものだと、今でも大変、感謝しています。これが、自分の頭からいまでも、ついて離れず、自分の生涯テーマのひとつであります。たとえばシュレディンガーの「生命とは何か」、朝永振一郎の「物理学とは何だろうか」など、≪エントロピー≫がでてくるので、とてもお気に入りの本であり、ボロボロですが、座右の書として、いまでも読みなおしています。しかし、まだ、このテーマの卒論ができあがっていません。大胆にも、卒論は孫たちへの絵本に作って、ひきついで貰いたいという願いを抱いています。

④幸福論；ＴＶ「100分de名著」に、テーマが、『幸せ』について考えようというのがあり、ＴＶ講座のテキストを購入したことがあります。その中の、経済学の巻の、アダム・スミスの≪国富論≫によれば、“幸せとは、人の痛みがわかることである”だそうです。経済学を学ぶというありがたい機会をいただいて以来、我が人生は、≪わが庭に植えた、この桜の樹が大きく成長してくれたように、自分は人の痛みのわかるひとに少しずつでも成長しただろうか、近づいてきただろうか？≫と、庭の八重桜の大きく成長した幹を毎朝、撫でるたびに、自問自答しています。いつか、百歳の平櫛田中（ひらぐし でんちゅう）展で観た書にあったように、“60、70は鼻たれ小僧、まだ、これから、

これから”と己を慰めて、かつ激励しているところです。

⑤**わたしの健康法；**自分はリタイアしておりますので、これといった職務はなく、毎日が日曜日ということで気ままにくらしています。(i)ノルディック・ウォーキングの講習＆実習会に何年か前、妻と二人で参加して以来、裏の山へよく歩いて行きます。左右の足首には、おもりを巻き、背中には、鉄アレイなどをいくつか入れたリュックを背負ってノルディックポールを左右にもって、１時間半とか２時間ぐらいは歩きます。ゴルフはレッスンのほかに、懇親会コンペに参加して楽しんでいます。元の会社の九大同窓会のゴルフコンペにたまに参加することもあります。(ii)脳の体操には、般若心経の篆刻作品をみて篆書（てんしょ）の臨書をしたり、英単語クロスワードの回答ハガキを投函したり、クレパスや色鉛筆で絵手紙を出したり、ブログを書いたりして日々を楽しんでいます。あるとき、広告チラシをちぎって、自家栽培キューリを、山下清のように、ハガキに≪ちぎり絵≫にして送ったとき、これは、どういう絵の具を使ったのか？という返事をもらったことがありました。(iii)お酒は≪自称酒豪≫でありましたが、昨年の師走のクリニックでドクターから、「お酒はやめてください」と言われて、それ以来、素直に完全に従っております。体重が数キロ減りました。今夜は、ゴルフの仲間のB.B.Q、しかし、ノンアルでガマン、ガマン！

とりとめもなく、≪つれづれなるままに≫書きました。これで わたしのリレー通信は 終わりです。同窓会会員のみなさまの、今後のご健康とご多幸をお祈り申し上げて、筆を擱きます。(2015年８月13日夜　～19：18、②８月20日朝　9：45～10：34)。

比婆山　若松重喜 妙子

リレー随想

卒業後あっという間の40年!!

大阪府食品流通厚生年金基金 常務理事
佐藤　敏弘氏
1975(昭和50)年卒

九州大学の思い出

九州大学を卒業して早40年となりました。大学の４年間田島寮、松原寮にお世話になりました。田島寮では90ccのバイクを寮の先輩から譲ってもらい教養部と寮をバイクで往復し、たまにバイクで大分に帰っていました。また、授業のないときは家庭教師のほか、デパートの販売員、道路工事、測量、中洲のボーイといろんなバイトに精を出しました。Ｃ棟の２階に住んでいまして、医学部の門司高校出身の田中博君、大分県同郷の工学部の藤本君、佐伯鶴城高校で同じクラスだった理学部の竹下君と近くの部屋にたくさんの友達が出来て楽しく過ごしておりました。また、大分舞鶴高校で同じクラスであった経済学部の木元正君も部屋が一緒だったりし､高校の延長のようでもありました。(高校２年生の時に佐伯鶴城高校から大分舞鶴高校に転校しました)。木元君とは高校、大学、会社と長い付き合いになりました。

食事は何時も教養部、寮の生協でお世話になりました。たまに教養部近くの食堂で食べた100円定食がすごくおいしかったように思いだされます。

また、箱崎の松原寮では、急な登りの坂道では大型ダンプに抜かれるぐらい馬力の小さな軽四三菱ミニカに乗っていました。通学に使っていましたが、家庭教師で太宰府に行ったり、同郷で会社も同じであった別府鶴見ヶ丘高校出身の法学部角健君と九州一周し、鹿屋の農学部の西山君の実家に泊めていただきました。鹿屋から志布志湾に釣りにつれて行っていただいた思い出があります。

松原寮では寮委員長も務め、寮祭、日田行進、九重高原サマーキャンプなど九大女子寮、福岡女子大寮、九州工業大学寮、福岡、北九州の大学・短期大学の寮から参加者を募り開催してきました。寒い冬の日の夕方から翌日の朝にかけて、福岡から50数キロの日田までの行進、九重高原サマーキャンプでのキャンプファイヤーの時のテーマソング「遠い世界に」はいい思い出となりました。また、松原寮祭では、カクテルを作るのに、シェーカーを振っていたように思います。

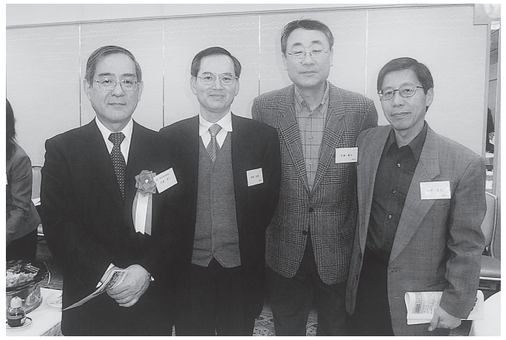
経済学部でのゼミは正田ゼミで国際金融論を習っていましたが、残念ながら4年生の時に正田先生がお亡くなりになりました。学部葬があり、出席した記憶があります。先生亡き後、深町先生がゼミ生全員を引き取ってくださり卒業までお世話になりました。

住友生命の思い出

大分舞鶴高校・九州大学の先輩である園田一蔵先輩（現経済学部同窓会関西支部理事49年卒業）のお誘いがあり面接を受け、昭和50年４月住友生命保険相互会社に入社しました。大阪にて入社時研修を同期生314名と受けた後、広島支社勤務となり、朝早くから夜遅くまで保全、業務の仕事と忙しい毎日となりました。大阪本社の１か月研修で知り合った家内と翌年結婚し、53年に長男誕生と同時に大阪本社転勤となり医務課というところで４年間勤務しました。以後岸和田の営業所長３年、名古屋の営業所長３年、名古屋支社のスタッフ３年、横浜の業務事務部長５年、船橋の総務部長３年半、堺支社のスタッフ２年、京都の法人担当３年、大阪本社の厚生年金基金担当８年と38年間の勤務で９か所の勤務地となりました。この間寮と社宅を11回転居しました。父親が警察官だったため、杵築を振り出しに杵築２回、別府４回、佐伯２回、大分１回転居し、大分県内を杵築で生まれ、高校卒業まで９回の転居となりました。会社での11回と合計すると生まれて63年の間に20回の引っ越しをやってきたこととなります。約３年に１回の割合です。本当にあわただしい仮住まいばかりの人生でした。大分県そのものが故郷ですが、これだけ転居していることもあり、ここが故郷で幼馴染のみよちゃんがいるところがありません。会社の社宅で勤務先が一番近かったのが岸和田の営業所で約１キロメートル、一番遠かったのは横浜山手の社宅から東京を通り過ぎ千葉の船橋まで58キロメートル２時間の通勤が一番長かったものです。でも、横浜山手の社宅が横浜中華街から歩いて20分、外人墓地が歩いて15分と日本各地から大勢の方が観光に来るところに歩いて15分20分のところに住まわせていただいたことには感謝しております。10年前に西宮門戸厄神に住むようになり、もう転勤しなくて良くなり、落ち着いたようでもあり、転居しなくてもいいのかそわそわするようでもある今日この頃です。

経済学部同窓会関西支部について

10年前に本社に着任すると前出の園田先輩が同じ部署に居り、また直接の上司が現九州大学経済学部同窓会関西支部長の小森田憲繁先輩（46年卒業）でした。こういったご縁があり本社着任と同時に上司命令？もあり経済学部同窓会関西支部のイベント総会、勉強会、街歩き、ゴルフにと毎回欠かさず出席していました。３年たった平成20年ごろ、同窓会理事にという話があり、理事会にも出席するようになりました。４年前からは園田先輩から引き継いだ会計を担当しています。また、関西支部事務局長の中野光男君（三井住友銀行ＯＢ）、大学の寮で一緒でまた､大分県同郷の関西同窓会理事の中野善文君（りそな銀行ＯＢ）両中野氏と同期３人で頑張っています。中野善文君とはいろんな縁があります。国東高校卒業でありながら友人のいる大分舞鶴高校の寮に遊びに来て、南こうせつや伊勢正三にも会ったという自慢話もあり、大分舞鶴高校の関西ミニクラス会にも出席して貰っております。



2011年２月 関西支部総会
左より川波洋一先生、中野光男氏、佐藤、中野善文氏

第二の職場と近況

住友生命定年までの８年間、厚生年金基金の仕事で、大阪、京都、福井、愛媛、長崎、熊本のお客様を回っていました。定年のころ、厚生年金基金への社会保険庁からの天下りが問題となり、自身の後任探しに困っておられたお客様から頼まれ、大阪府食品流通厚生年金基金の仕事をさせていただいております。昨年の４月に５年後に厚生年金基金は解散するようにという法律ができ、解散に向けての仕事をしております。来年の３月解散認可取得し、清算結了までにはまだ３年近くかかりそうです。

趣味としましては、13年前から住友生命の職員に紹介されて「大阪生野高校の山歩こう会」に入れていただき毎月近くの山登りに参加しております。すべて日帰りのため、大阪近辺の山ですが六甲山、金剛山はじめ滋賀の比良山、京都の愛宕山等この13年間で出席数は120回となりました。山のない土曜日

白馬八方ケルン

日曜日は同居の孫（８歳、５歳）のお相手をしたりコナミのプールにてアクアウォーキングを私よりかなり年配の方々と一緒にやっております。

定年後は家内と月１回の行事を、旅行、食事会なんでもいいからやろうということになりまして、いろんなところに出かけております。最近は６月に長野県小諸市の標高2000メートルにある高峰温泉、美ケ原の王ヶ頭ホテルに家内の友人（千葉県在住）と行ってきました。

また７月にはクラブツーリズムのツアーで家内と７月18日より３日間白馬に行ってきました。初日は台風の余波もあって名古屋からの特急「しなの」が運休になり自由席に並ぶというトラブルもありましたが、１時間半遅れで白馬五竜に着き、テレキャビンで白馬五竜高山植物園まで行きコマクサ、エーデルワイス、ヒマラヤの青いけしなど見ながら１時間散策出来ました。二日目はゴンドラ、ロープウェイを乗り継ぎビジターセンターから栂池自然園１周5.4キロメートルの木道を４時間かけ散策出来ました。水芭蕉湿原での水芭蕉、ニッコウキスゲ等たくさんの高山植物を見ることが出来ました。登りの階段、木道、雪上を頑張って展望湿原まで歩きましたが残念ながら雲に隠れ白馬大雪渓は見ることが出来ませんでした。三日目は八方尾根に行き三つのリフトを乗り継いだあと１時間半かけて第一ケルン、石神井ケルン、八方ケルンを見ながらひたすら八方池目指して登りました。白馬鑓ヶ岳山、杓子岳、白馬岳白馬三山が八方池に映って素晴らしいとパンフレットにありましたが、ここも雲に隠れ逆さ三山は見ることが出来ませんでした。山小屋から白馬縦走でなくホテルに泊まりながら快晴ではないにしろ雨に降られず白馬三つの自然研究路、植物園、自然園に行けたのはラッキーでした。

もうしばらく基金の仕事が続きますが、山登り、コナミ、ちょっとゴルフ、同窓会活動に頑張っていきたいと思います。

リレー随想

若かりし日の懐かしき朋友たち

鳥越　憲行氏
1977（昭和52）年卒

平成27年４月18日に東京四ツ谷にて東京在住者を対象に、昭和48年入学の経済学部還暦同窓会があり、24人が出席した。昨年の福岡での同窓会にて、東京でも還暦同窓会を開催しようとの話が持ち上がったとの事で、12クラスの吉元君（経済学部同窓会東京支部事務局長）が幹事、11クラスの私及び10クラスの嶋田君（経済学部同窓会評議員）が協同して同窓会が開催された。一人一人の近況を聞いていると、ふと「若かりし日の懐かしき朋友たちの姿」が蘇ってきた。

入学時１年上の先輩の主催のもと、11クラスの新入生歓迎コンパが南公園で行われた。私は先輩と日本酒の一気飲みに挑戦。先輩が先に倒れ、次に私は８合目で倒れ、その時介抱してくれたのが、西川君（現在北九州で社長）だった。

教養部時代に西川君、立花君（柳川市で公認会計事務経営）、Ａ君（長崎県庁）、Ｂ君（死去）と私で「必殺遊び人５人衆」を結成し、中村学園、福女、西南等で合コンを行ったりもした。

学園祭では、11クラスとして「ぜんざい屋」を出店し、収益金の一部を「水俣病患者」に毎日新聞社経由で寄付した。私の家主の娘さんが毎日新聞社に勤務していた縁で、私と鳴瀬君（現神奈川大学教授）等が毎日新聞社に赴き、寄付したところ、翌日の毎日新聞に掲載されて驚いた。

遊び過ぎて、お金がなくなると西川君やＡ君と一緒に、築港に朝６時から並び日雇い労働者として働いた。築港では、蛸壺に連れていかれるのではと不安感を抱きながら日雇い労働者数名と一緒にトラックに乗った。船底で荷運びをしていたところ、クレーンで船上に積み上げる途中荷崩れし、荷物が私の頭の近くに落ち、危ない目にもあった。

箱崎での学部では、木下ゼミに参加し、ゼミ幹事役を買って出て、国東半島の寺で、萩の民宿で、長崎の民宿で、ゼミ合宿を行った。国東半島の寺では「座禅」を組み、萩では「松下村塾」、長崎では「グラバー邸」等の観光も行い、なかなか好評であった。

木下ゼミ萩合宿

木下先生から次のゼミ合宿が楽しみとの評を得て、ゼミでは勉学よりも民宿案内本を片手に次のゼミ合宿はどこにしようかと思案をめぐらせていた。ゼミには、11クラスの鳴瀬君、ティアックの麻雀仲間の田中君、ＮＥＣの坪根君、10クラスの岸本君がいた。

卒業旅行として必殺遊び人５人衆のそれぞれの実家を訪れ、それぞれの家族に多大な迷惑をかけたが、これも良き思い出となった。

その他、髪を肩まで伸ばしグループサウンドを結成していた三菱重工の為久君、新婚当時埼玉の越谷で先輩から借りていたマンションで偶然にも出会った三井不動産の中西君、大手町で偶然出会った丸紅の中尾君、教養部時代から40年以上たって再会した富永さん、北欧をヒッチハイクした商工中金の田辺君が11クラスとして出席していた。

ふと、思い出から覚めると、「あれから40年」である。名前を言ってくれなかったら、誰かわからなかった人も。私は、最近頭髪が薄くなり、老けたなあと思っていたが、同窓会での皆さんもそれなりの年輪を経た姿となっていた。

全員の近況報告が終わり、西川君のマジックショーが始まった。西川君は、歌はうまいし、話上手である。どんなマジックを見せてくれるのかと楽しみにしていたら、なんとＴＶに出てくるマジシャンあるいはそれ以上の腕前ではないか。出席者全員が西川君のカードマジックの近くに座って見るも、誰も見抜けず、30分間ずっと感嘆していた。流石一流のセールスマン社長である。

私は、卒業後、大和銀行に入行し、大阪→北九州→大阪→東京→福岡→東京と転勤を重ね、横浜に最後の棲家を設け、金融の荒波を乗り越えつつ、現在出向先２社目で働いている。スポーツジムに通い始めて５年目で、平日１～２回、土・日曜日は妻と一緒にエアロビクス、グループキック、ズンバ等若い人に交じって汗を流している。サラリーマンを辞めたら、スポーツジム通いの他に、鎌倉で座禅を組むか、高校の仲間から誘われている「1000km独歩会」に入るか、色々と楽しみな妄想を描いている。次回の同窓会では、メンバーの中で一番若々しい姿で出席したいと願っている。

リレー随想

大学はどこへ向かうのか

九州大学経済学研究院教授
大下　丈平氏
1978（昭和53）年卒
1980（昭和55）博士入

昨年の経済学部同窓会報第57号に養父規幸君が執筆されたリレー随想からバトンを受けて、今回は同期の大下が僭越ながら同窓会報第59号に向けて書かせていただきます。

昨年（平成26年）、九州大学経済学部昭和48年入学者の大方が無事還暦を迎えました。これを機に、還暦を祝うといった名目で、昨年の11月８日に久しぶりに地元福岡で同窓会が開かれました。まず、この場を借りて、いつも同窓会の幹事役を引き受けてくれる嶋田正明君と吉元利行君に感謝の気持ちを伝えておきたいと思います。

当日、午前11時過ぎから筥崎八幡宮で還暦のお祓いをおこない、その後福岡リーセントホテルで懇親会を開催いたしました。25名を超える同窓生が久しぶりに久闊を叙する絶好の機会となりました。またこの懇親会には、経済学部での我々の恩師である逢坂充先生と福留久大先生が駆けつけてくださり、大先輩として還暦を迎えた我々を叱咤激励していただきました。その後、三々五々箱崎文系地区の経済学部棟まで散歩し、卒業後40年近くなる学び舎に立ってそれぞれに当時を思い起こすことになりました。

聞くところによると、その後も有志が集まって２次会、３次会を行い、そこでも昔話で盛り上がったとのことです。

さて、同期の鳴瀬成洋君など大学の研究者になった少数の者を除いて、多くの同窓が大学を離れてそれぞれの仕事を続けてこられたわけですが、小生は、幸か不幸か、引き続き大学に職を得て、それも卒業後40年近くなる同じ学び舎に帰って来ることになりました。（以下少し小生の最近の思いをつづり、リレー随想の任を果たしたいと思います）。そして、そこで20年以上、研究という名に値するかどうかはわかりませんが、なんとか生きながらえながら、細々とやってきました。ともかく細々とやってきたのはいいのですが、この間、残念ながら大学は実質的に大きく変貌を遂げてしまいました（箱崎の建物はまったく昔のままですが）。ここで「残念ながら」と書いたのは、同窓生がこの大学の変化の実情を知るならば、恐らく残念に思うであろうと確信するからであります。

他方で、いわゆる株式会社といった組織にたっぷり浸かった同期の中には、それは同然であると考える人も多くおられるでしょう。けだし、同窓と話をするたびに、彼らの中には当たり前のように、大学の社会貢献、要するに大学が社会にどのように貢献できるか、またはするべきであるかについて熱心に語る者が多くいることに気づかされるからです。もっともこのことは同窓といっても大学経済学部の同窓にかぎりません。中高の同窓においても、大方は同じ思いを抱いていることでしょう。それは、当世、企業の社会責任（いわゆるＣＳＲ）の理念と重なりながら、大学にもこれまで以上の社会貢献を求めることが普通になされるようになったからであると想像されます。大学の社会貢献、社会責任の達成、さらに最近はグローバル人材養成における貢献などが強く求められるようになってきました。こうした社会のニーズに貢献できない大学・学部は不要であるとの理念が、徐々に着実に浸透してきています。その結果として、大学はガバナンスの仕組みを各部局の教授会を軸とした旧来型のものから大学執行部を中心としたトップダウン型のものに変えることが、当たり前のように唱えられるようになりました。

大学がガバナンス・システムを変革し、社会の要請に迅速に対応する自由度を持てば持つほど、大学内部の構成員はますますその自由度を失うというパラドックスについては広く認識されています。かつて時がゆったりと流れていた古き時代の大学とそこでの学生生活への郷愁と、他方での学生を含めすべての構成員が社会に対する目に見える形での短期的な貢献・成果を求められる大学の置かれた現状の間のギャップは、同窓においては（期待をも込めて）矛盾することなく存在しているように思われます。しかしながら、我々大学の構成員においては、この難儀なパラドックスと今後も対峙していかねばならないことは言うまでもありません。

社会に貢献できない大学・学部にはイエローカード、時にはレッドカードが提示されるという今の当局の方針は、まさに大学運営を企業経営の如く進めていくと宣言しているのと同じように思われます。こうした大学をめぐる目まぐるしい変化について、これから少しずつ同窓と話し合いをもっておく必要があります。それは彼らがその大学の実情を知って驚かないようにするためですが、それと同時に、還暦を迎え、小生も含め、皆体力的な衰えを感じつつありますが、今一度彼ら同窓の協力を得るために、いまできることをやっておきたいと思うからです。

最後に一言。本小論の原稿執筆時点（８月お盆）で、いま安保法案の審議が山場を迎えつつあります。わが国の国柄を大きく変えることになるこの法案がどのようになっていくのか。これまで述べてきた大学運営の新しい流れとこうしたものを持ち出す国家運営の現状の両方を重ね合わせながら、この法案の行く末を重大な関心を持って眺めています。（同窓会報第59号が公刊される11月にはとっくに結果は判明していますが、その後の取り扱いも重大な関心事です）。

リレー随想

過去と選択

A-LL株式会社取締役副社長
水田　晃斉氏
2012（平成24）年卒

「人生は選択の連続である」

シェイクスピアの有名な言葉だが、この言葉を知った当時（高校生）の私にはこの言葉が意味することはもとより誰の言葉かすらよくわかっていなかった。しかし、その後いくつかの岐路を経験して徐々にその意味を知ることとなった。

「数学科にするか経済学科にするか」

８年前の１月、当時の私はどちらの学科にするか、選択を迫られていた。元々数学が得意（今思うとむしろ数学以外が苦手なのかもしれない）だったというだけで、受験の願書を出すぎりぎりまで大学の数学科に行こうかなと考えていた。しかしその当時の担任と話し、本当に自分がやりたいことは何なのかを考えてギリギリになって自分の目標を叶えるために経済学部に行った方がいいのではと思い、当時は周りのほとんどの人から猛反対されたが浪人し文転することとなった。

浪人時代は苦手な文系科目、特に古文、現代文に取り組んだが、最終的に経済・経営学科ではなく理系の学科である経済工学科を受験したため、浪人したときに力をいれた成果を発揮する機会はなかったが念願の経済学部に入ることとなった。

大学入学後は熱中できるものが見つからず、何となく高校のころから得意だった数学を活かすことができる統計学のゼミに入り、日々平凡な大学生活を過ごしていた。

「大企業にするか、ベンチャーにするか」

３年時になり10月から就職活動が始まった。特に何かに力をいれていたわけでもなく、どういうところで働きたいという目標があるわけでもなかった私はこのとき大学生活で初めて「自分が本当にやりたいことは何か」を考えることになった。そして、そのことを考え続けるうちに自分がなぜ経済学部を選択したのか、そして何がその選択の要因になったのかを思い出し、そのことが最終的にベンチャーを選択する最大の要因となった。

「最初の夢」

高校で選択を迫られ本当にやりたいことは何だったのかを思い返したところ、一番最初に思い描いた夢が『社長』だったということをぼんやりと思い出した。最初に言いはじめたのは５歳ぐらいだったが、小学１年生のときも、６年生のときも文集の「自分の夢」を書くときには『社長になる』と書いていた。その当時はどういうビジネスをやりたいとか、どこでやりたいとか何のイメージもわかなかったが漠然と何となく自分らしくそのまま生きていたら社長になれると全く何の根拠もない自信をもって生きていた気がする。

「社長になるということ」

５歳のころの夢を思い出し、「社長」になるために就職活動をしようと決断した私は、社長になって何をしたいかということが全く何も考えていなかったことに気づいた。そして社長になること自体には何も意味がなく、社長になって何を成すかが重要であるということに22歳にもなって初めて気がついた。社会に出たこともなく、ビジネスに関して何もわからなかった私には就職活動の時点で社長になってやりたいことはもとよりどんな業界のビジネスに携わるかさえ全くわからなかった。そのため、業界にはこだわりをもたなかったが、期間を決めないと「いつか」で終わってしまうと思ったので「30歳で社長になる」とだけ自分の中で決めた。そうすると就職後、修行期間が７年しかないことになるので、より短期間で一番成長できるところを選択することになり結果として大企業ではなく設立して７年のベンチャーに就職することに決めた。

経済学部同窓会理事の中村龍太君と卒業式にて
当時から友人ではあったが理事をきっかけに当時以上の仲になった

「最終面接と葛藤」

就職活動中に或るベンチャーの方々に気に入ってもらい最終選考まで残ったがそのときの私はまだ迷いがあった。数ある会社の中で本当にこの会社がいいのか？ 30までには辞めようと思っているのにそのことをかくして入るのはどうなのかなど面接の前に会社の近くの公園のベンチで一人考えていたことを今でも覚えている。結局、最終面接で志望動機を聞かれ「社長になるために最もいい会社だと思ったから」と返答した。その後、色々深掘りされたがそのことを認めてもらえたこともありその会社に新卒で入社することとなった。

「チャンスがきたら飛び乗る」

「30歳で社長になる」と決めたはいいが内定後にインターンをしても、学生のときに色々な社会人にあってもどういうビジネスをしたいかなどは全くと言っていいほど思い浮かばなかった。また、もし起業するチャンス、例えば革新的なビジネスモデルを思いついたとしても全く知識も経験もないので、本当にスケールするビジネスかどうか判断することができないことに気づいた。ただ未来のことは誰にもわからないので「起業のチャンスがきたらまずは迷

わず飛び込もう」とだけ自分の中で決意をして新社会人として働き始めた。

「想定外の起業」

新社会人になって働き始めたある日、いきなり起業するチャンスが巡ってきた。全員が私よりも年上（１人を除いてみな30代）だったが私が会社を起て彼らを雇うことになった。いきなりの話ではあったが「チャンスがきたら飛び込む」と決めていたので迷いはなかった。「社長になる」と決めたときは「従業員を雇う」ということの責任の重さを考えたことはなかったが、会社を起ててそのことを実感した。

「本当にやりたいことと今」

自分で会社を起ち上げ１年ほどが過ぎたころ、余裕がでてきたため、自分なりに色々なビジネスを調べるようになっていた。そこでやはり今後はＩＴが欠かせないということに気づき、自分が調べた内容をもとに今後の世界はこうなるのではないか、そしてこういうビジネスのニーズがあるのではないかと仮説でしかなかったが自分なりの考えを持てるようになっていた。その後、ビジネスプランコンテストなどを通じて考えに共感して一緒にやろうと言ってくれる友人や投資家などと巡りあい、転職という形でＩＴ業界へ移ることになった。１年ちょっとではあるがＩＴの会社で働くことや他社の人たちとのつながりなどのおかげで少しずつではあるがやりたいことを実現するために進んできている。

「大きな選択と小さな選択」

ここまでは文理選択やベンチャーの選択、起業の選択など大きな選択ばかりを書いたが実は人生を構成している選択の中には（そのときは）小さな選択でしかなかったものが後々大きな影響をもたらすことがあるということを実感することがあった。大学時代に何となく数学が得意だからという理由で選択していた統計学のゼミが私の今やりたいことを達成するための重要なキーになっていることが調べているうちに判明したのだ。当時はまさかこんなことになるとは思ってもみなかったがあのときに何気なく統計学を専攻したおかげでアルゴリズムの理解などをスムーズに行え、非常に助かった。そして特に大学時代、勉学に力をいれていなかったが、ゼミの勉強ぐらいはやるかと思いゼミの勉強だけは力をいれたことも今の自分を助けることにつながった。

「過去と今とこれから」

今回寄稿させていただく機会をいただいたことで自分の学生時代を思い返すいい機会になった。しかし、思い返してみても何か特別なことをやっていたわけではなかったため、学生時分の話で書くに値するエピソードはなかったため大学以前から社会人になった今、そしてその先について書くことに決めた。ただ文章を書き始めてみて過去と今はつながっていることや過去の何気ない選択が未来に大きく寄与することがあることを学んだ。また、未来の選択によっては「書くに値しないような学生生活」も素晴らしい学生生活だったと思える日が来るかもしれないのでそのときは今以上に九大経済学部を選んだこと、色んな教授、学友と出会えたことを誇りに思えるのではと感じている。

経済学部名誉教授の会

第19回の九州大学経済学部名誉教授の会は、2015年４月４日（土）16時から19時まで、経済学部近くの「リーセントホテル」で開催されました。今回は、大学文書館で仕事中のカメラマン・桂木氏が駆けつけて撮影して下さったので、鮮明な写真が得られました。添付した写真の方々が今回の参加者です。４月に研究院長に就任された磯谷明徳先生、４年間研究院長を務められた山本健兒先生のお二人が現役教授陣を代表して参加下さいました。名誉教授側は、木下悦二・秀村選三・大屋祐雪・市村昭三・川端久夫・津守常弘・原田溥・児玉正憲・逢坂充・近昭夫・矢田俊文・福留久大・塩次喜代明名誉教授の13名が出席しました。新参加の塩次先生は、現在の勤務校・福岡女子大での行事の都合で遅参となったため別枠での収録となりました。従来継続参加の丑山優先生は、勤務校の新学期の合宿授業で今回も欠席でしたが、来年からは名誉教授の会を第２週に異動することになり、元気な姿での参加が期待できます。（写真に丑山先生の姿が無くて心配された同窓生諸兄姉、御安心下さい）。

経済学部から、できたばかりの『九州大学経済学部90年史資料集』をいただき、「資料編」と「写真編」に収録された多彩な記事や写真を繰りつつ、それらに関わる大学・学部・大学院の様子を山本先生から伺いました。新院長の磯谷先生からは、経済学部・研究院の抱える重要な課題について報告がありました。大学外からは、文部科学省によって文系学部の見直し、抜本的再編の要請がなされていて、本来の教育・研究業務の充実に加えて、そういう組織改編の対応が急がれるとのことです。（名誉教授の間でも、文科省の学問理解の弱さに懸念の声が相次ぎました）。九大内の動きとしては、2018年までに移転を完了して秋学期からは全面的に伊都キャンパスで教育・研究が行われることが本決まりとなりました。（箱崎キャンパスの風物を惜しまれる同窓生諸兄姉は、残り３年の間に再訪を試みて下さい）。

名誉教授の先生方は、昨年と変わりなく矍鑠としておいでのように見受けられます。木下先生・秀村先生は、奇しくも同じ12月10日が誕生日、次の誕生日で木下先生は95歳、秀村先生は93歳を迎えられます。大小の学会・勉強会に足を運ばれたうえで、木下先生はインターネットを駆使して最新資料を収集、「アメリカ資本主義の構造変化について」（中央大学「経済学論纂」55巻５・６合併号）を、秀村先生は選りすぐりの文献・史料を重ねて「近世九州農村における下人=奉公人・日雇の類型」（九州大学「経済学研究」81巻４号）を発表されました。大屋先生は、1926年６月24日のお生まれですので、89歳を超えられました。愛弟子の浜砂先生がドイツで客死される悲運に落胆されつつも、気丈に追悼の集いなどに示された同窓の皆様の御厚意に謝意を述べておられます。本号の「リレー随想」欄に「ある日の向坂先生」を寄せて頂きました。

昭和一桁組の先生方も旧年と変わりなく各々の道に勤しまれる毎日のようです。市村先生は、恩師・関根正雄先生の旧約学を深めつつ、教会活動に励んでおられます。市村先生から参加者に、秀村先生の手記「戦時中の私と聖句（みことば）」の収録された同人誌が提供されました。川端先生は、1968年に九大に戻られたときの課題がようやく結実、今は虚脱状態、一息いれて新しいことに挑戦したいと言明。津守先生と原田先生は、九大定年後同じ九州情報大学で研究会をともにされた仲ですが、お二人とも家事を担いつつ、今も外国語文献の解読に刻苦精励の日々の模様。児玉先生は、元気で快適、学問をenjoy中、10月にはカナダの学会にお出かけの由。逢坂先生は、九大定年後日本国憲法に思いを深めるとともに、大野城市の自然環境保護団体「もみじの森会」を主宰、昨年はそちらの表彰式と重なって名誉教授の会は欠席。今年は出席が叶って、磯谷先生採用時の選考主査として数々の秘話を披露されました。

昭和二桁組では、近先生が大学時代のゼミ仲間と安保法制を憂うるネットワーク構築、と同時に相変わらず現代史の大著読破を楽しんでおいでです。その成果の一端を本号特別寄稿「Ｔ.ピケティ『21世紀の資本』について」に窺うことができます。磯谷先生の特別寄稿とともに興味深いピケティ論特集が出来たと自負しています。矢田先生は、半世紀の「知的労働」の結実、『石炭産業論』『地域構造論』『国土政策論』『公立大学論』４巻構成の著作集を刊行中。２月に「上・理論編」、８月に「下・分析編」が刊行された『地域構造論』は、1100頁を超える書物の隅々まで刺激に満ちた質・量ともに文字通りの超大作。『石炭産業論』については、教え子にあたる外川健一氏（熊本大学教授）が「ＯＢ健筆模様」に紹介の一文を寄せて下さいました。久々の新人、塩次先生は、九大定年後４年経過、女子大に場所は移っても九大時代と同様に「新領域」開発に余念のない毎日、経済産業省のプロジェクトに採用が決定、張り切っておられます。最後に、わたくし福留は、秀村先生の発案で、名誉教授の会の「1968 ～ 70年・九大闘争=紛争」記録係に指名されたのですが、作業はチチとして進まずハハとして捗らず、恐縮の極みです。目下、当時学生部長だった奥田八二先生の日記を奥様から拝借、「ハチジさん」の眼に経済学部や教養部の姿がどう映ったか、確かめつつあります。（2015・９・10）

前列左から３番目山本健兒先生、４番目磯谷明徳研究院長を挟んで、右より。市村昭三、秀村選三、大屋祐雪、木下悦二、川端久夫の各名誉教授。後列右より。矢田俊文、津守常弘、児玉正憲、福留久大、逢坂充、原田溥、近昭夫の各名誉教授。別枠：塩次喜代明名誉教授

九州大学経済学部　国際学術交流振興基金執行状況報告（平成26年度）

経済学部創立60周年を記念して、同窓会の皆さまを中心にご寄付頂いた多額の資金は、「国際学術交流振興基金」として、経済学部における国際学術交流のために活用させていただいております。平成26年（2014年）は、経済学部の創立90周年の年となりますので、これまで30年の長きにわたって、ご支援をいただいたことになります。平成26年度の活動状況については、別表の通りご報告申し上げます。併せて、この記念すべき年にわが学部の国際学術交流のために活用させていただきましたことに改めてお礼を申し上げます。

別表にあります通り、平成26年度は、学術特定研究員１名の雇用と第９回三大学（中国人民大学、南京大学、九州大学）国際カンファレンス（同年度は、南京大学で開催）への研究者派遣に充当させていただきました。また、特筆すべきは、経済学部の90周年を記念してハーバード大学教授デヴィッド・ハウエル氏をお招きし、記念シンポジウムを開催できたことであります。19世紀の日本経済史研究の大家であるハウエル教授には、「グローバル時代の日本経済と人材育成－グローバル・ヒストリーから見た現代日本の課題－」というテーマで基調講演をいただきました。パネルディスカッションにおいては、ハウエル教授のほか、徳川家廣氏（徳川宗家19代）、島津忠裕氏（島津本家33代）にお加わりいただき、本学の篠崎教授、鷲崎准教授の司会で、多様な観点から討論を行った次第です。大講義室が満席になるほど沢山の聴衆の参加を得、多くの質問やコメントが寄せられました。

毎年ご報告申し上げております通り、本基金は、皆さまから頂いた貴重な財産でございますので、可能な限り持続可能な形で使わせていただくことが肝要かと考えております。九州大学をはじめ我が国の大学においては、教育研究の国際化が重要な戦略課題であり、今後とも使途を吟味しながらも有効かつ有益な形で本基金の活用に努めて参る所存であります。同窓会の会員の皆様へは、これまでのご協力に心から感謝申し上げますとともに、今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げ、ご報告といたします。

【国際交流委員会委員長　**川波　洋一**】

申請者	内　容	期　間
【　海外派遣　】		
川波　洋一（教授）	※研究集会への参加（村藤教授、中村講師、儲講師） The 9th Joint Conference by Renmin University of China, Nanjing University and Kyushu Universityに参加する	26.6.11 ～ 26.6.14
【　海外在住研究者招聘　】		
篠崎　彰彦（教授） 岩田　健治（教授） 北澤　　満（准教授） 鷲崎俊太郎（准教授）	※海外からの招聘（David　Howell） 「グローバル時代の日本経済と人材育成：グローバル・ヒストリーからみた現代日本の課題（仮）」 世界情勢の激変に揺れた19世紀の日本経済史を専門とするハーバード大学のハウエル教授を招き、その研究成果を踏まえてのグローバル人材の育成が叫ばれる現代日本の課題と展望を考察すると共に、今後の国際交流強化を視野に入れた特別講義を学生と教員向けに行う	26.6.2 ～ 26.6.9
藤井　美男（教授）	※国内からの招聘（ベルギー国立ヘント大学教授 Marc Boone） ベルギー国立ヘント（Gent）大学の教授 Marc Boone氏が来日され、東京及び京都で講演会・研究会が開催されるのに伴い、滞在最後の数日を利用して本学にお招きし、講演会の開催をするとともに、学術交流を図ることを目的とする	27.3.22 ～ 27.3.26
【　学術特定研究員の設置　】		
	前田　隆二学術特定研究員の雇用	26.4.1 ～ 27.3.31

平成26年度卒業生就職状況

平成27年５月１日現在、(　)は女子で内数

学　部

就　職　先	人数(　)
American Family Life Assurance Company of Columbus	1
あいおいニッセイ同和損害保険	1（1）
アサヒ飲料	1
旭化成	1
宇土市役所	1
宇部興産	1
MS&ADシステムズ	1
NECソリューションイノベータ	1
NECネッツエスアイ	1
NTTドコモ	1
NTTビジネスソリューションズ	1
NTTファシリティーズ	1
エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ	1
大分銀行	2（2）
大分ダイハツ販売	1
大島造船	1
沖縄振興開発金融公庫	1
オービック	2
オリエントコーポレーション	1（1）
大分県民共済生活協同組合	1
大林組	1
嘉穂無線	1
唐津市役所	1
川崎重工業	2
関西電力	1
外務省	1（1）
学生情報センター	1（1）
北九州市役所	1
九州電力	1
九鉄工業	1（1）
九電工	1
九電ビジネスソリューションズ	1
国立市役所	1
熊本市役所	1
クリック	1
空研工業	1
神戸製鋼所	1
コカ・コーラウエスト	1（1）
国税庁	1
国土交通省	1
裁判所	1（1）
西部ガスエネルギー	1（1）
西部瓦斯	1
シービーアールイー	1
澁澤倉庫	1
新生銀行	1
下関市役所	1（1）
新日鉄住金ソリューションズ	1
新日鐵住金	1
JFEエンジニアリング	1
JFEスチール	2
ジェーシービー	2（1）
ジャパネットホールディングス	1（1）
ジーユー	1
ジュピターテレコム	1
スカイネットアジア航空	1（1）
住友生命保険相互会社	1
ソフネット	1
損害保険ジャパン日本興亜	3（2）
大正製薬	1
第一生命	1
大和証券	3
太宰府市役所	1
大広九州	1
TJMデザイン	1
デロイト・トーマツ・コンサルティング	1（1）
電源開発	1
東海東京ファイナンシャル・ホールディングス	1
東京海上日動火災保険	2（1）
東建コーポレーション	1
東芝	2（1）
東芝三菱電機産業システム	1
凸版印刷	1
トヨタ自動車	2
トヨタ自動車九州	3
豊田自動織機	1
豊田通商	1
長崎県庁	2（1）
長崎県信用保証協会	1
西日本建設保証	1
西日本シティ銀行	3
西日本電信電話	1（1）
西日本旅客鉄道	1（1）
ニトリ	1（1）
日本航空	1
日本製紙	1
日本生命保険	1
日本たばこ産業	1
日本ヒューレット・パッカード	1
日本政策金融公庫	1
日本政策投資銀行	1
日本能率協会総合研究所	1
日本放送協会	1
日本郵便	1
農林水産省九州農政局	1
農林中央金庫	2
野村證券	2
濱田重工	1（1）
阪急阪神百貨店	1（1）
久光製薬	1
日立製作所	1
日立ソリューションズ西日本	1
広島市役所	1
広島県庁	1
日立ソリューションズ	1
ビジネス・ワンホールディングス	1
福岡銀行	12（2）
福岡市役所	2
富士急行	1
富士通	5（1）
富士通エフサス	1
富士フィルム	1（1）
古河電気工業	1（1）
ファミリーマート	1
防衛省九州防衛局	1
丸栄産業	1
丸紅	1（1）
みずほ銀行	1
みずほフィナンシャルグループ	4
三井住友海上火災保険	1（1）
三井住友銀行	2（1）
三井ハイテック	1
三井物産	1
三菱住友信託銀行	1（1）
三菱東京UFJ銀行	6
三菱UFJリース	1
三菱商事	1
三菱電機	1
村田製作所	2
明治製菓ファルマ	1（1）
ヤマエ久野	1
山口市役所	1（1）
山口フィナンシャルグループ	2
ヤマハ	1
ヤマハ発動機	1
LIXIL	1
りそな銀行	3（1）
ルネサンス	1
総　計	186（37）

修士課程（学府）

就　職　先	人数(　)
阿蘇バイオテック	1
石井税理士事務所	1
ウェザーニューズ	1
F-KIDS International	1
NECキャピタルソリューション	1（1）
愛媛県庁	1
エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ	1（1）
オービック	1
尾道市立大学	1
嘉穂無線	1
華為技術（中国）	1
鹿児島大学	1
九州旅客鉄道	2
九州経済調査協会	1
黒崎播磨	1
熊本学園大学	1
KDDI	1
国土交通省 大阪航空局福岡航空事務所	1（1）
香蘭ファッションデザイン専門学校	1
交通銀行（中国）	1
コメリ	1
光大銀行（中国）	1
佐賀県庁	1
サンライフ	1
西部ガス	1
佐世保市役所	1
十八銀行	1
西部技研	1
損害保険ジャパン日本興亜	1
第一三共	1
テュフラインランドジャパン	1
テクノスジャパン	1
日本航空	1
西日本シティ銀行	1
西日本新聞社	1
西日本旅客鉄道	1
ニトリ	2（1）
パナソニック	1
パソナテック	1
パワーマックス	1（1）
福岡空港ビルディング	1
福岡県庁	1
福岡工業大学	1
福岡国税局	1（1）
ふくおかフィナンシャルグループ	1
藤津碍子	1
ブリオ	1
福岡教育大学	1
ファルマウニオン	1
POSCO-JKPC	2
ミツミ電機	1
三好不動産	1
みらいコンサルティング	1
ミロク情報サービス	1
宮崎大学	2
メディアインターナショナル	1
らくだ企画	1
楽天	2（1）
早稲田大学	1
総　計	64（7）

九州大学経済学部同窓会役員名簿

（カッコ内は卒業年次～昭和、ただしHは平成）2015年９月

役員	氏名
会長	貫　正義(43)
副会長	籾井　勝人(40)　小森田憲繁(46)
事務局長	藤井　美男(55)
監事	工藤　重之(52)　貞刈　厚仁(52)
顧問	大屋　祐雪(26)　淵上　敏晴(29) 福岡　道生(30)　松浦　正純(30) 森山　靖章(30)　鈴木多加史(33) 進谷　庸助(35)　石橋　英治(36) 池田　弘一(38)　佐野　壬彦(38) 檀　豊隆(40)
（理事）	
本部	貫正義会長　藤井美男事務局長 山本健兒教授　丑山優名誉教授 深川博史教授　大石桂一教授
大学	磯谷明徳研究院長　清水一史教授
東京支部	籾井勝人支部長　秦喜秋副支部長 杉哲男副支部長　吉元利行事務局長
関西支部	小森田憲繁支部長　太田光一副支部長 久保隆二副支部長　中野光男事務局長
福岡支部	貫正義支部長　光富彰副支部長 貞刈厚仁副支部長　髙木直人副支部長 平井彰事務局長

（評議員）

秀村　選三(22)　大屋　祐雪(26)　江藤　正憲(27)
棚倉　亨(27)　井原　伸允(28)　高岩　淡(29)
淵上　敏晴(29)　山下　正迪(29)　山本　和良(29)
福岡　道生(30)　松浦　正純(30)　森山　靖章(30)
濱口　廣海(31)　鈴木多加史(33)
江口　傳(34修士)　真藤　乃輔(34)
麻生喜久男(35)　進谷　庸助(35)　三輪　晴治(35)
石橋　英治(36)　種村　茂明(36)　山道　茂樹(36)
箱島　信一(37)　池田　弘一(38)　佐野　壬彦(38)
檀　豊隆(40)　松浦　哲也(40)　籾井　勝人(40)
沖　弘隆(41)　安陪　義宏(42)　平本　公雄(42)
右田　喜章(42)　秦　喜秋(43)　杉　哲男(43)
寺原　義之(43)　貫　正義(43)　跡部　千春(44)
一丸　孝憲(44)　甲斐　琢己(44)　鶴川　洋(45)
森　恍次郎(45)　青柳　泰教(46)　太田　光一(46)
小森田憲繁(46)　吉井　勝敏(48)　岩崎　俊彦(49)
久保　隆二(49)　園田　一蔵(49)　加藤　孝典(50)
佐藤　敏弘(50)　富井　順三(50)　中野　光男(50)
石田　光明(51)　古賀　英樹(51)　光富　彰(51)
工藤　重之(52)　貞刈　厚仁(52)　志村　恭子(52)
綾部　正博(53)　岡田　裕二(53)　古賀　英基(53)
境　正義(53)　長竹　正隆(53)　吉元　利行(53)
小川　重巳(54)　川原　晃(54)　小林　真幸(54)
嶋田　正明(54)　三浦　正(54)　平井　彰(55)
池上　恭子(56)　窪田　秀樹(56)　冨山　幸三(56)
米村　健史(56)　片山　基之(57)　楠　雅之(57)
髙木　直人(57)　川上　寛(58)　梅原　晋(59)
柴田　祐二(59)　友池　精孝(59)　吉留　郁(59)
斉藤　浩志(60)　田中　和教(61)　成宮　正和(61)
齊藤久美子(62修士)　桜木　良平(62)
高本　英一(62)　岩中　雄次(63)　大坪　勇二(63)
古川　和哉(H1)　清丸　泰司(H2)　山崎　正良(H2)
北村　英照(H3)　谷村　信彦(H3)　林　秀信(H3)
尾花　研(H4)　川島　満(H4)　権藤　健太(H4)
中村　昌子(H4)　松延　篤(H4)　池田　泉(H5)
宇出　研(H5)　原山　泰之(H5)　三浦　芳徳(H5)
向　勇一郎(H5)　山崎　浩(H7)
上田　純也(H8修士)　久保　文一(H8)
竹下　将史(H8)　手嶋　秀幸(H8)　藤川　昇悟(H8)
渡辺　正司(H8)　松田　和俊(H9)　仲　芳雄(H10)
安藤　大輔(H12)　濱田　貴将(H12)　岩貝　和幸(H15)
瀬戸　貴博(H15)　青柳　未央(H16)　土公　文平(H17)
宮本　傑(H17)　稲波　祥子(H18)　小林　秀章(H18)
伊藤　健司(H19)　亀井　祐輔(H20)　森内　勇貴(H20)
首藤　洋志(H22)　秋山　卓哉(H24)　北山　隆之(H24)
竹之下一也(H24)　中村　龍太(H24)　水田　晃斉(H24)
中野さゆみ(H26)　嶋田　直人(H27)
市村　昭三(元教官)　清水　一史(現教員)

各支部の役員

東京支部……

支部長	籾井　勝人(40)
副支部長	秦　喜秋(43)　杉　哲男(43)
顧問	淵上　敏晴(29)　福岡　道生(30) 池田　弘一(38)
監事	今井　俊之(44)　富井　順三(50)
理事	高岩　淡(29)　三輪　晴治(35) 種村　茂明(36)　箱島　信一(37) 梅原　晋(59)　岩中　雄次(63) 濱田　貴将(H12)　岩貝　和幸(H15) 青柳　未央(H16)　土公　文平(H17) 宮本　傑(H17)　稲波　祥子(H18) 小林　秀章(H18)　亀井　祐輔(H20) 首藤　洋志(H22)　秋山　卓哉(H24) 北山　隆之(H24)　竹之下一也(H24) 中村　龍太(H24)　水田　晃斉(H24) 中野さゆみ(H26)　嶋田　直人(H27)
事務局長	吉元　利行(53)
事務局次長	川原　晃(54)　大坪　勇二(63) 林　秀信(H3)　原山　泰之(H5) 伊藤　健司(H19)

関西支部……

支部長	小森田憲繁(46)
副支部長	太田　光一(46)　久保　隆二(49)
顧問	松浦　正純(30)　鈴木多加史(33) 石橋　英治(36)　佐野　壬彦(38) 檀　豊隆(40)
事務局長	中野　光男(50)
事務局長代理	清丸　泰司(H2)
会計	佐藤　敏弘(50)
監事	甲斐　琢己(44)
	※以上の方は理事を兼任。
理事	江藤　正憲(27)　棚倉　亨(27) 濱口　廣海(31)　山道　茂樹(36) 松浦　哲也(40)　跡部　千春(44) 園田　一蔵(49)　古賀　英基(53) 冨山　幸三(56)　片山　基之(57) 川上　寛(58)　斉藤　浩志(60) 齊藤久美子(62修士)　谷村　信彦(H3) 北村　英照(H3)　川島　満(H4) 松延　篤(H4)　権藤　健太(H4) 向　勇一郎(H5) 上田　純也(H8修士)　藤川　昇悟(H8) 種村　茂明(36)　箱島　信一(37) 梅原　晋(59)　岩中　雄次(63) 濱田　貴将(H12)　岩貝　和幸(H15) 青柳　未央(H16)　土公　文平(H17) 宮本　傑(H17)　稲波　祥子(H18) 小林　秀章(H18)　亀井　祐輔(H20) 首藤　洋志(H22)　秋山　卓哉(H24) 北山　隆之(H24)　竹之下一也(H24) 中村　龍太(H24)　水田　晃斉(H24) 中野さゆみ(H26)　嶋田　直人(H27)
事務局長	吉元　利行(53)
事務局次長	川原　晃(54)　大坪　勇二(63) 林　秀信(H3)　原山　泰之(H5) 伊藤　健司(H19)

福岡支部……

支部長	貫　正義(43)
副支部長	光富　彰(51)　貞刈　厚仁(52) 髙木　直人(57)
事務局長	平井　彰(55)
監事	森　恍次郎(45)　三浦　正(54)
評議員	（＊は運営委員）

秀村　選三(22)　大屋　祐雪(26)
井原　伸允(28)　山下　正迪(29)
山本　和良(29)　森山　靖章(30)
江口　傳(34修士)　真藤　乃輔(34)
麻生喜久男(35)　進谷　庸助(35)
沖　弘隆(41)　安陪　義宏(42)
平本　公雄(42)　右田　喜章(42)
寺原　義之(43)　貫　正義(43)
一丸　孝憲(44)　鶴川　洋(45)
森　恍次郎(45)　青柳　泰教(46)
吉井　勝敏(48)　岩崎　俊彦(49)
加藤　孝典(50)　石田　光明(51)
古賀　英樹(51)　光富　彰(51)
工藤　重之(52)　貞刈　厚仁(52)
志村　恭子(52)　綾部　正博(53)
岡田　裕二(53)　境　正義(53)
長竹　正隆(53)　小川　重巳(54)
＊嶋田　正明(54)　＊三浦　正(54)
＊平井　彰(55)　池上　恭子(56)
窪田　秀樹(56)　米村　健史(56)
楠　雅之(57)　髙木　直人(57)
＊梅原　晋(59)　柴田　祐二(59)
友池　精孝(59)　吉留　郁(59)
田中　和教(61)　成宮　正和(61)
桜木　良平(62)　高本　英一(62)
古川　和哉(H1)　山崎　正良(H2)
尾花　研(H4)　中村　昌子(H4)
＊池田　泉(H5)　＊宇出　研(H5)
＊三浦　芳徳(H5)　＊山崎　浩(H7)
竹下　将史(H8)　手嶋　秀幸(H8)
渡辺　正司(H8)　＊久保　文一(H8)
＊松田　和俊(H9)　＊仲　義雄(H10)
＊安藤　大輔(H12)　＊瀬戸　貴博(H15)
＊森内　勇貴(H20)

……

名古屋地区	板山　和弘(54)
広島地区	佐藤　敬(23)　白石　順一(34)
大分地区	高山泰四郎(39)

九州大学経済学部同窓会歴代会長

初　代　田中　　定氏（昭和50年10月４日～）（３期８年）
第２代　森下　　弘氏（昭和58年２月４日～）（１期３年）
第３代　岡野　正實氏（昭和61年10月24日～）（２期６年）
第４代　谷川　大介氏（平成４年10月９日～）（１期１年）
第５代　渡邉　彦士氏（平成５年７月７日～）（１期３年）
第６代　福岡　道生氏（平成８年10月11日～）（１期３年）
第７代　吉田　清治氏（平成12年２月10日～）（１期２年）
第８代　森山　靖章氏（平成14年５月31日～）（１期３年）
第９代　平山　良明氏（平成17年７月７日～）（１期３年）
第10代　池田　弘一氏（平成20年７月７日～）（２期６年）
第11代　貫　　正義氏（平成26年７月７日～）

同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（３年間分4,500円）になっております。
終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

①終身会費	一括	45,000円
②　〃	３分割	15,000円×３回（1.5年間で納入完了）
③　〃	６分割	7,500円×６回（３年間で納入完了）
④普通会費	３年間分	4,500円ずつ（11回・49,500円の納入で完了）

◎平成18年（2006年）３月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。
◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。
◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に３回又は６回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。
◎会費納入や住所変更等のデータは、平成27年９月30日現在で集計しました。

住所など身辺の事情に変更が生じましたら、すみやかに下記同窓会事務局までご連絡ください。

九州大学経済学部同窓会事務局　（開室：平日の月・火・木・金　10時～17時）
〒812－8581　福岡市東区箱崎6－19－1　九州大学経済学部内
TEL 092-642-2442／FAX 092-642-2348／E-mail：dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
経済学部同窓会ホームページ　http://koyukai.kyushu-u.ac.jp/alumni/4

複数の同窓会関係者が写されている写真類を掲載したいと考えております。
適当なものがございましたら事務局までご連絡下さい。